



歯学だより  
Vol. 7



2012 年

岡山大学歯学部  
岡山大学大学院医歯薬学総合研究科 歯学系  
岡山大学病院 歯科系 広報専門部会

目次

◇ 学部長ご挨拶			
「みんなで日本一の歯学部を創りましょう」	岡山大学歯学部長	窪木 拓男	4
◇ 副病院長ご挨拶	岡山大学病院歯科系代表副病院長	森田 学	6
◇ 副研究科長ご挨拶	岡山大学大学院医歯薬学総合研究科 副研究科長	浅海 淳一	7
◇ 新任・転出教員より			
【新任】			
「着任のご挨拶」	小児歯科学分野	仲野 道代	9
「就任のご挨拶」	生体材料学分野	松本 卓也	10
「着任のご挨拶」	歯科保存修復学分野	星加 知宏	12
「着任のご挨拶」	歯周科	工藤 値英子	13
「着任のご挨拶」	インプラント再生補綴学分野	秋山 謙太郎	14
「着任のご挨拶」	補綴科（クラウン・ブリッジ）	水口 真美	15
「着任のご挨拶」	顎口腔再建外科学分野	水谷 雅英	16
「着任のご挨拶」	小児歯科学分野	高島 由紀子	17
「着任のご挨拶」	歯科矯正学分野	片岡 伴記	18
「着任のご挨拶」	予防歯科	丸山 貴之	19
「着任のご挨拶」	歯科放射線学分野	畦坪 輝寿	20
「着任のご挨拶」	歯科麻酔・特別支援歯学分野	友安 弓子	21
「着任のご挨拶」	口腔生化学分野	下野 賢吾	22
【転出】			
「近況報告」	大阪医科大学 口腔外科学教室 教授	植野 高章	23
「転任のご挨拶」	徳島大学大学院ヘルスバイオシステム研究部 予防歯科学分野	玉木 直文	24

「転出のご挨拶ーもっと大きな岡山大学歯学部“愛”ー」 大阪大学大学院歯学研究科 顎口腔機能再建学講座 歯科補綴学第一教室 峯 篤史	26
「転出のご挨拶」 鳥取大学医学部口腔顎顔面病態外科学講座 本城 正	28
◇海外より 「ペンシルベニアより」 インプラント再生補綴学分野 内部 健太	29
◇岡山歯学会優秀論文受賞者寄稿 「岡山歯学会優秀論文賞を受賞して」 歯科薬理学分野 十川 千春	30
◇岡山歯学会奨励論文受賞者寄稿 「岡山歯学会奨励論文賞を受賞して」 口腔顎顔面外科学分野 奥井 達雄	31
「岡山歯学会奨励論文賞を受賞して」 予防歯科学分野 竹内 倫子	33
◇本年度の活動 「海外援助 ～ハイフォン医科大学訪問について～」 顎口腔再建外科学分野 高尾 香名	34
「震災復興援助について」 歯周病態学分野 久保 克行	36
「東日本大震災における医療支援活動 ～ 歯科衛生室 ～」 歯科衛生士室 三浦 留美	38
◇卒後臨床研修センターより 「歯科医師卒後臨床研修の役割を考える」 総合歯科 鈴木 康司	40
◇歯科衛生士室から 「平成23年度 歯科衛生士室 活動報告」 歯科衛生士室 三浦 留美・樋口 夕紀子	41
◇技工室から 「技工室の近況」 技術部歯科部門技工室 神 桂二	43
◇診療科トピックス 「スペシャルニーズ歯科センターの活動について」 スペシャルニーズ歯科センター センター長 江草 正彦	45
「初年度活動報告と次年度に向けての抱負ー医療支援歯科治療部」 医療支援歯科治療部 副部長 曾我 賢彦	48
◇編集後記	50

「みんなで日本一の歯学部を創りましょう」

岡山大学歯学部長  
窪木 拓男

岡山大学歯学部は日本で最も若い歯学部である。したがって、歴史は短い、その反面、固定概念にしがみつく必要もないため、いろんなことにトライができるというよい面も持ち合わせている。

最も特徴的であるのは、その臨床実習であろう。私立大学の多くが臨床実習に患者を充当することができなくなってきたが、岡山大学は幸い献身的な外来患者も多く、充実したクリニカルクラークシップを実施できている。現在、重要な観点は、少子高齢化に伴って増加している、高齢者・有病者医療や在宅介護医療の教育をどのように充実させるかという点である。現システムで最も容易に実現可能と思われるのは、超急性期病院である大学病院で日々行われている手術に伴って行われている周術期管理歯科医療をターゲットにしたものである。岡山大学は、周術期管理では大変有名な試みを前森田病院長の時代から行ってきた。岡大では、狭義の周術期に拘らず、抗がん剤の投与などを含めた医療支援歯科治療部を立ち上げており、この方面でのビジョンは全国一と言ってもよい。この春から周術期管理歯科における診療報酬が追加された点は我々が全国に向けて胸をはれる大きな成果であろう。次に考えなくてはならないのは、維持期や慢性期医療の現場、さらには在宅介護の現場に学生を送り込むシステム作りをすることである。この点に関して、岡山大学歯学部は学長裁量経費を頂き、学外の老人介護福祉施設等に学生を送りこむ学外インターンシップ授業という先進的な取り組みを行ってきたが、臨床実習と重なっていることもあり、拡充は難しい状況である。できれば、さらに学部初期から中期にこのような授業を設けて、全身疾患の知識を増やすモチベーションとすべきではないか。各分野の先生方には、教育の全国的な競争力を増すと言う観点から、周術期管理歯科、維持期や慢性期さらには在宅介護現場に必要な歯科医療の教育にご協力をいただければ有り難い。大学院GP事業をみてもわかるとおり、教育は大学の売りの中心事項となりつつある。

一方、大学が市民病院のような地域の中核病院と明らかに異なるのは、やはり研究教育機能を持つことである。研究は、我々の行っている歯科治療の理由を明確にし、新たな治療法の開発に大きく貢献する。研究マインドが高い医師と研究マインドが低い医師では治療態度が異なり、研究マインドが低い歯科医にとっては、その治療が本当に患者にとって効果的かどうかは別にして、やや難しく患者に負担をかける治療術式を選択しがちであるということが知られている。幸い、岡山大学歯学部の卒業生は、大学院に臨床専門医コースがあることも手伝ってか、現在のところ残ってくれる学生さんも多い。専門医の質が問われる今、各分野がどのような形で専門医制度の質を保証していくか、正念どころである。しっかりした教育があつて初めて、その結果として臨床権利が生まれるという医療本来のあり方を見つめ直す必要がある。本コースの内容の充実によって今後もこの傾向が続くことを祈りたい。

基礎研究者を養成する一般コースに学生が集まりにくくなっているのは問題である。私自身は、生命の謎に挑む基礎研究が大好きである。最近、原因不明の強い痛みを来す神経因性疼痛という病気に効果がある薬が臨床現場に投入された。ご存じの方も多いと思うが、プレガバリンという薬である。この薬は、過剰に興奮した興奮性神経系において、電位依存性カルシウムチャネルの機能に対し補助的な役割をになう $\alpha 2 \delta$ （アルファ2デルタ）サブユニットと強く結合する。すると、神経シナプスにおけるカルシウム流入が低下し、グルタミン酸等の興奮性神経伝達物質の放出が抑制される。私は最近、この薬を投与して20年近く原因不明の痛みで苦しんで来た患者を救う経験をした。臨床を劇的に進歩させるにはやはり基礎研究が必要である。基礎研究を通して目の前にいる患者だけでなく、全世界の無数の患者の役に立てる研究を発信していきたい。岡山大学歯学部とその大学院の研究業績が日本の歯学部の中でも優れていることは嬉しい。特に、一論文あたりの被引用数が本邦トップであることは、出版された論文の質が非常に高いことを示している。これまでよい論文を書かれた先生方に感謝を申し上げますとともに、この伝統を我々が汚すことがないように全力で努力したい。

振り返れば、私は1期生として本学に入学し、たくさんの先生方にお世話になった。今度は我々が学生さん達や若者達に貢献する番である。新しい臨床や教育を育み、歯科医学がいかに医療において不可欠なものかを示したい。また、研究を通して、世界が劇的に変わる瞬間をみてみたい。構成員各自にお願いしたい。各自が比較されるべき学外に目を向けて、前向きに競争してほしい。各自が日本一になれば、必ず岡山大学歯学部は日本一であるはずだから。みんなで、日本一の歯学部を創りませんか。私はできると信じているのです。

## 「副病院長ご挨拶」

岡山大学病院歯科系代表副病院長  
森田 学

昨年度、スペシャルニーズ歯科センター、医療支援歯科治療部という中央診療施設が本格的に稼働を開始したことは、記憶に新しいことと思います。どちらの診療科も、前年度（平成 22 年度）と比較して患者数、診療費用請求額ともに伸びております。昨年の 4 月、副病院長としての所信表明の際、この 2 診療科の充実を唱えました。安堵しております。各科の自助努力が大いに評価されます。加えて、歯科系の診療スタッフ全員が、この 2 科を育てようと一致協力したことも大きな要因です。その成果として、口腔の健康が大切であることを医師や看護師の方々に分かってもらえる、そのような良質の歯科医療を提供することが可能となりました。感謝いたします。

今年度は、耳鼻科、形成外科と協力して頭頸部がん患者の治療を担当する「頭頸部がんセンター」、そして歯科として口腔がんの専門的治療を担う「口腔がん専門外来」がスタートします。高齢化とともに口腔がん患者数は増加しています。私は、がん治療については門外漢なので間違っているかもしれませんが、頭頸部がんの生存率はこの数年変化（改善）していないと聞きます。その課題を如何に克服できるか、あるいは前方支援・後方支援も含め患者の QOL を高める方策は何か、これら 2 つのセクションからそれに対する答えが導かれることを大いに期待します。

組織改革のうねりは岡山大学病院に限ったものではありませんが、この目まぐるしい変化に、実質的な部分がどこまで対応できているのでしょうか。「急がば回れ」という諺を、このような時期に口にするのは不適切かもしれませんが、これまでの変化、改革の結果を素直に見直し、また誰にとつての改革であったのか俯瞰的に眺め評価することも必要です。かつての英国首相チャーチル曰く「我々は現実を見つめなくてはならない。何故なら、現実が我々をみつめているからだ」、どの時代でも通用する格言であると思います。

さて、岡山大学病院の現在の悩みは駐車場問題です。受付が予約時間よりも 30 分～1 時間遅れたが故に、その日の診療を断念した事例も聞いております。さらに、短くてもこれから 3 年間、鹿田キャンパスは工事ラッシュです。医歯薬学融合型教育研究拠点施設新営、基礎医学講義実習棟改修、臨床研究棟改修、J ホール新営などが計画されております。車両の混雑は避けようがありません。新規バス路線（岡山駅⇄病院）の開拓、係員の増員など、組織としての対策はご存知かと思えます。個々の先生方・診療科におかれましても、可能な限りの対策を考えてください。私は、車で来院される患者様については 8:30 から、あるいは午後からの予約をとるよう心掛けています。一方、歯科系に限ると、老朽化著しい床、壁、トイレ等の改修が当面の課題でしょう。

昨年の東日本大震災では、専門家集団の言動の軽さ、そして科学の無力さを痛感しました。では医療についてはどうか。我々各人が真摯に反省し、努力を怠らない様にしたいものです。

## 「副研究科長ご挨拶」

岡山大学大学院医歯薬学総合研究科 副研究科長  
浅海 淳一



この度、窪木拓男教授の学部長就任を受け、その後任として岡山大学大学院医歯薬学総合研究科の副研究科長に指名されました。歯科放射線学分野を担当して4年になりますが、今回が初めてのこのような役職への就任となります。本来なら皆様に研究科の現状と今後の展望に関してお伝えするところではありますが、役割をまだ、よく把握しておりませんので十分な情報をお伝えできないことをお詫びします。そういった中で、私が研究科での業務に関わりました分子イメージング事業の報告と直接研究科とは関わりがありませんが頭頸部がんセンターのことを報告したいと思います。

まずは今後の研究部門の先進的な役割を果たすもののひとつと考えられるのが、文部科学省の岡山分子イメージング高度専門人材育成事業です。本事業は平成23年から岡山大学医歯薬学総合研究科と独立法人理化学研究所の協力で実施されています。個人的には平成21年から理化学研究所 分子イメージング科学研究センター メタロミクスイメージング研究ユニットの客員研究員であり、また歯科放射線学分野を担当していることから、歯学分野では私がこの領域に最も関係があるとのことで、本事業の立ち上げとともに産学官連携イノベーションセンターOMIC 事業推進協力教員として推薦され、産学官連携センター教授を併任しております。この産学官連携センターは、まだ発足したばかりでこれから発展が期待される分野ではありますが、放射線医学研究所や理化学研究所では、すでに実績を積んでいる分野でもあり、この施設が十分に機能して行くことが望めます。分子イメージング分野の発展により、がんおよびアルツハイマー病などの脳神経疾患の診断、人体での様々な機能解析、また診断とともにピンポイントでの治療を同時に行うことも可能であり、さらに創薬の開発も可能です。歯科分野でも標的となるプローブを開発することによってこういった診断と治療と創薬開発が可能になり、その発展が期待されます。しかしながら歯科分野ではまだ研究チームが立ち上がっていないのが現状です。医学部、薬学部、理研との協力態勢の下で歯科部内での分野を超えたチームづくりが進むことを望んでいます。そして、歯科特有の分子イメージング技術が開発されることを期待しております。この分野での研究に興味とアイデアをお持ちの先生はご連絡ください。

次は、歯科と医科が連携して頭頸部がん治療を行う頭頸部がんセンターが平成24年4月から開設します。それと同時に口腔がん患者の歯科窓口として口腔がん専門外来が運用を開始します。頭頸部がんセンターではセンター長が形成外科の木股先生、副セン

ター長が耳鼻咽喉科の小野田先生と私です。口腔がん外来は口腔外科病態系の佐々木先生を中心に運用します。両者が有機的に機能し、口腔がんの早期発見、早期の有効な集学的治療を行い、さらには術後の顎骨や咬合機能の再建が充実し、生存率のみならず、QOLの向上が図られることが期待されます。

諸外国との関係では、岡山大学、吉林大学（中国）、成均館大学校（韓国）のトライアングル交流事業であるキャンパス・アジア事業（大学生の交流プログラムに関する共同事業）が推進されています。日中韓の3カ国における大学間で1つのコンソーシアムを形成し、単位の相互認定や成績管理、学位授与を統一的行なっていくというものです。さらには、英語のみならず中国語、韓国語とそれぞれの国の言語の習得まで視野に入れ、3国での将来の人的交流が期待されています。国際色豊かなキャンパスにするために全世界、特に東アジア、東南アジア系の大学院生、大学生、教職員の交流が望まれます。アジア諸国では現在、中国やインドの発展は研究部門においても著しいものがあります。それに加え、日本への留学が昭和の時代に多かった台湾、その後、平成には比較的多かったブラジルやトルコなどはかつての日本のような発展の段階に入っています。これらの勢いある国の学生や研究者と活発な交流をすることで活性化を図っていくことも必要と思います。それとともに岡山大学ではベトナムをはじめ諸東南アジア各国との交流も現在活発に行われています。私もアジアではありませんが、この6月に南米に出かけブラジルとペルーを訪れる予定です。サンパウロ大学には7つのキャンパスがあり、平成21年にはそのうち3つのキャンパスを訪問しました。訪問したバウルキャンパスには世界一と自称する（おそらくそうだと思います）頭蓋・顎顔面、唇顎口蓋裂センターがあり、驚かされました。今回もサンパウロキャンパスとリベイラオキャンパスを訪れる予定です。遠方なことと母国語がポルトガル語ですので ODAPUSのような国際交流には適さないかもしれませんが、ラテン語を習得する良い機会になり得ます。今後も関係を深め、こちらからの留学生も送ることができるようになり、更に交流を行えるようにできたらと思います。ペルーではラテンアメリカの学会で講演してきます。歯科放射線の関係ではラテンアメリカの学会は国際学会の4倍もの人が集まります。南米には歯科医が多いのでしょうか。こういったラテンアメリカ系の国々とも交流が盛んになることを期待しています。

まだ、私の副研究科長の就任が決まって間もないこともあり、記載が研究科、病院、学部のことが混在してしまいましたが、研究科の役割はやはり大学院の運営、大学院生の教育ですので、大学院生にとって魅力ある研究科を目指さなければならないと思っています。前任の現窪木学部長に指導を仰ぎながら任務を果たして行きたいと思っています。皆様に置かれましても、研究科に対してご助言等ございましたらご連絡下さいませようお願いします。

## 「着任のご挨拶」

小児歯科学分野  
仲野 道代



岡山大学歯学部の皆様方におかれましては益々ご健勝のこととお慶び申し上げます。平成23年4月1日付けで、小児歯科学分野の教授を拝命し赴任いたしました。早いもので、もう1年が経過しようとしています。

改めて自己紹介させていただきますと、私は、平成5年に広島大学歯学部を卒業後、大阪大学歯学部小児歯科学教室に研修医として入局し、それ以後18年間在籍いたしました。入局当初から、ウーロン茶ポリフェノール等の齲蝕抑制物質に関する研究に従事してきました。その後は、*Streptococcus mutans* によるバイオフィルム形成に関する分子生物学的な研究を行ってきました。

平成15年には、ニューヨーク州立大学に博士研究員として約2年間の留学の機会を与えていただき、現在までこの研究を継続しています。

私自身は、これまでに岡山大学に縁はありませんでしたが、赴任して1年、ようやく周囲の環境に慣れてきたと思います。これまでの小児歯科学分野および小児歯科診療室の運営にあたっては、学内の多くの先生方に支えられていると実感しております。それにより、少しずつ自分のフィロソフィーを出した運営ができるようになってきていると思います。

私は、これまでの経験から、感じや保護者のニーズに対応する診療室の運営が重要であると考えています。大学病院であるが故に、様々な理由で歯科治療が困難な子ども達と向き合う毎日ですが、いかに必要な治療を可及的に早期に安全に行っていくかが、小児歯科専門医の力量だと考えます。さらに教室内の若いスタッフと直に向き合い、自分自身の持つ知識や技術を伝えることが重要だと考えています。実際に、若いスタッフの日々の成長を目にすると、彼らが小児歯科専門医にふさわしい人材になっていく姿が目に見えます。

研究面では、研究室の改装が進み、多くの分子生物学的解析が遂行できる環境となつてまいりました。現在は、「*Streptococcus mutans* のシグナル伝達システムの解明」というテーマのもと、大学院生たちとともに日々邁進しております。将来有望な若いスタッフと巡り会えたことに感謝しております。彼らには、大学人としての研究遂行の重要性を実感してもらえるようなより環境作りをしていきたいと思っています。また、その成果を学会発表や学術論文として世界に発信していくような指導をしていきたいと考えております。

これまで学んできた診療・研究・教育に関する全てを十分に生かし、当分野の発展に全力を注いでまいりたいと考えております。先生方におかれましては、今後も教室および診療室運営にご支援の程、どうぞよろしくお願い申し上げます。

## 「就任のご挨拶」

生体材料学分野  
教授 松本 卓也

2011年10月より、生体材料学分野を担当させていただくことになりました、松本卓也です。私は、1997年大阪大学歯学部を卒業後、すぐに歯科理工学講座に大学院生として入りました。現在と同様、当時においても学部卒業後すぐに基礎系大学院に進学するという事は珍しかったわけですが、私自身も多分に洩れず、臨床実習が終わる直前までは臨床系に入局する気満々でした。では、なぜ歯科理工学講座に進んだのか？これには4つの理由があります。各々ばらばらの点が有機的に繋がり、思いもよらない結果が出たといったところです。

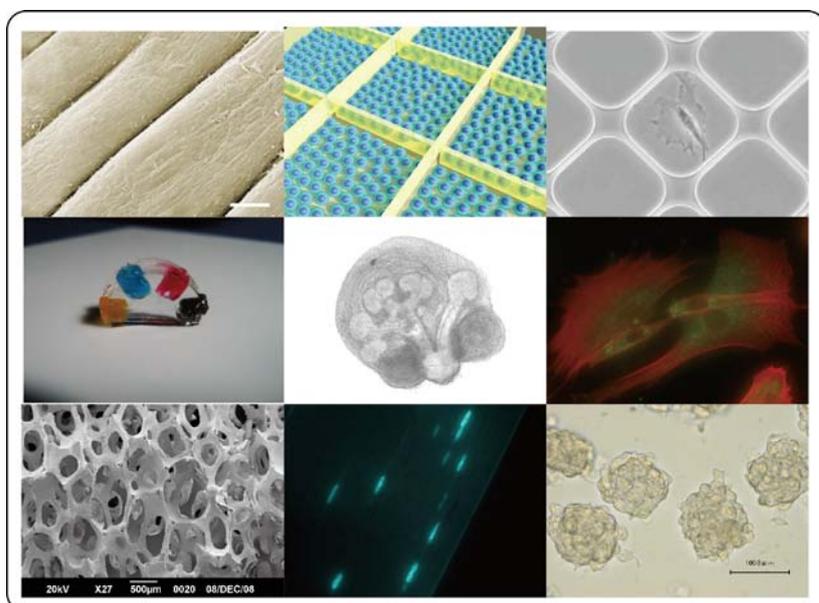
1つ目は、私の学年担任が基礎系研究者である浜田茂幸先生（現大阪大学名誉教授、口腔細菌学）であったことです。最終学年で進路を考えているある日、浜田先生が学年全員を集めて言い放った、「お前ら臨床ばかり何十年もやり続けるのか？」という非常に暴力的な（？）問いかけに対して、「なるほど、そういう考え方もあるのか」と、少し同意してしまいました。2つ目は、以前からテニスを通じて交流のあった高橋純造先生（現株アイディエス、大阪大学名誉教授、歯科理工学）に同時期に教授室に呼び出され、「これからはバイオマテリアルの時代や、一緒にやらへんか」と囁かれたことです。「バイオマテリアル」という聞き慣れない横文字に心が踊りました。3つ目は早期に留学する方法を探っていたことです。幼少期から国外留学は自分の中で決定事項でした。「臨床系に行くと、なかなか自分のタイミングで留学できないのでは」、と考えてしまいました（※あくまでも個人の勝手な考えです）。4つ目は会社という組織に興味をもっていたことです。学生時代に金融、経済関連の本を読み漁り、将来会社を作りたいと漠然と思っていたのですが、「歯科理工学講座で凄い材料や技術を開発したら、会社を作れるんとちゃうか！」と安直に考えてしまいました。これらを総合した結果、「よし、本当に研究というものが楽しいかどうか、確かめるだけ確かめよう」という理由付けができあがり、晴れて基礎系研究室の大学院生となった訳です。

さて、研究は、というと多くの先生方がご存知のとおり、小さな船で大海に漕ぎ出すようなもので、本当に興奮の連続でした。世界とシームレスで繋がり、自分が世界という舞台上で戦えるという現実には驚き、勇気が湧きました。「理解すること」、「発見すること」、「発想すること」の楽しさ、また、「美」を追求することの重要性、何よりも、これらが人間の欲望の根本であるということに気がつきました。そして、コモンセンスとしての「人のインテリジェンス」について思案するに至りました。

2003年から2年間の留学では「ポストン」という土地が世界の知の集積地であるということをもって体感し、世界の最先端がどのようにして作られていくのかということも認識しました。また、すばらしいメンター、たくさんの友人と知り合うことができました。当時ラボに所属していた同僚のポスドク、大学院生は、現在、16名が世界中でプロフェッサーとなっており、学会運営や共同研究など色々な側面で協力しあっています。

さて、「バイオマテリアル」という分野はこの20年、異分野融合（医学と工学）、再

生医療、ナノテクノロジーといった世界的潮流が大きな追い風となり、大きく発展してきました。この分野は2010年以降も「Integrative Biology」という新しい生命科学研究の流れを受け、さらに発展を続けています。私自身は大学院の研究テーマとして「アパタイト生成における有機質の影響」というバイオミメティック（生体擬似的）な石灰化研究を始めて以来、「*in vitro*での生体組織合成」へ向けた研究を進めて参りました。基礎研究としては最先端で非常にエキサイティングなのですが、実際の歯科医療への応用は残念ながらあまり進んでいないのが現況です。この現況を何とか打破できるよう、多くの先生方と共闘的に連携を組み、多くの議論を通して岡山大学にとって、地域にとって有意義な研究活動を進めていきたいと思っております。今後ともご指導、ご鞭撻を賜りますよう、どうぞ、よろしくお願い申し上げます。



## 「着任のご挨拶」

歯科保存修復学分野  
星加 知宏

この度、平成 24 年 4 月 1 日付けで歯科保存修復学分野の助教として着任いたしました星加知宏と申します。今回このようなご挨拶をさせて頂く機会を与えて頂きました皆様に感謝申し上げます。

ご挨拶を兼ねまして自己紹介をさせて頂きたいと思います。

私は岡山で生まれ岡山で育ちました。高校は岡山白陵高等学校です。平成 12 年に 21 期生として岡山大学歯学部に入りました。卒業後、岡山大学医学部歯学部附属病院総合歯科で 1 年間の臨床研修を受けた後、現在所属している歯科保存修復学分野の大学院へと進みました。大学院では吉山教授・西谷准教授のご指導の下、象牙質に対する接着を中心に研究を行ってまいりました。

大学院 3 年目の時にはアメリカのジョージア州にある Medical College of Georgia (現: Georgia Health Sciences University) の Dr. David H. Pashley の下で留学する機会を与えて頂き、半年間接着に関する研究を行いました。昔から英語が非常に苦手な私ではありますが、これまでご指導頂いたことに助けられ研究へと生かすことができ、大変有意義な留学となりました。

帰国後、平成 23 年に象牙質に対する新規材料の接着性をテーマに学位を取得しました。その後は、半年間医員として同医局に在籍し、再び留学する機会を与えて頂き、今年の 3 月一杯までの半年間を Dr. Pashley の下で研究させて頂きました。4 月からは助教という立場になり、大学院・医員の頃から行ってきた研究と臨床に加えて、新たに教育という仕事も加わります。これまで教育される立場におり経験も浅く未熟な私がどこまで貢献できるのか、これまでご指導頂きました先生方のことを思いますと責任の重さを感じられます。まだ自信はありませんが微力なりとも、これまでお世話になった方々や大学に少しでも貢献できるよう、又患者様や学生へと還元できるよう一層精進していきたいと考えております。

今後とも、皆様のご指導・ご鞭撻を賜わりますよう、よろしくお願いいたします。



## 「着任のご挨拶」

歯周科  
工藤 値英子



平成 23 年 4 月 1 日付けで岡山大学病院 歯周科 助教に着任いたしました。

私は、平成 12 年に岡山大学を卒業後、研修医として現教室に入局しました。2 年間の研修医修了後は、医員として当院に勤務、国立療養所大島青松園勤務から国立療養所邑久光明園に配置換を経て現在に至っております。また、国立療養所勤務期間中、歯周病態学分野にて高柴教授ご指導のもと、臨床研究に携わりながら「歯周病検査としての歯周病原細菌に対する血漿 IgG 抗体価検査の臨床的有用性の評価に関する研究」というテーマで学位を取得させて頂きました。学位取得までの生活は、

臨床と研究を並行して行うという面で、私の未熟さゆえに大変だったこともありました。それも、臨床、研究、そして教育をこなされる教員の先生方と同じ生活をするようになった今、大変貴重な経験をさせて頂いたと思っております。現在も引き続き、抗体価検査を用いて、動脈硬化性疾患や肺炎などの全身疾患と歯周病の関連性に関する臨床的検討を進めております。

助教着任後は、学生教育にも直接関わるようになりました。歯学部学生に講義をしながら、自分の大学生時代の講義内容と比較して、歯科医療が担う役割が時代とともに変化してきているのを実感しております。特に近年、医科-歯科連携が重要視されるようになり、歯科医療において全身の健康に貢献する領域が拡大しつつあります。それに伴って、多職種、多方面の専門分野からなるチーム医療の必要性が増していることを日々、臨床現場で痛感しております。歯周科として協力させて頂いている医療支援歯科診療部では、このチーム医療の重要性を様々な症例から学ぶ良い機会となっております。実際、医科歯科問わず他科の先生方やコメディカルの方々と連絡を密にとり、情報交換しながら診療を進めるケースが頻繁にあります。これからも、大学病院内外の先生方のお力添えを頂いて勉強させて頂きつつ、また、臨床研究の成果を活かしつつ、微力ながら患者へより質の高い医療の提供を目指したいと思います。

歯科系の皆様には、尚一層、お世話になるかと存じます。責任感を持って、謙虚な姿勢で任務を遂行していきたいと思っております。引き続き、変わらぬご指導ご鞭撻を賜りますよう宜しくお願い申し上げます。

## 「着任のご挨拶」

インプラント再生補綴学分野  
秋山 謙太郎

2012年4月2日よりインプラント再生補綴学分野の助教に着任させていただきました、秋山謙太郎と申します。簡単ではありますが自己紹介をさせていただきます。私は岡山大学歯学部16期生で、歯学部卒業後、当時の名称で岡山大学大学院医歯薬学総合研究科 顎口腔機能制御学分野（現インプラント再生補綴学分野）に進学、2005年歯学博士号を取得しました。その後、1年4ヶ月間、補綴科（クラウン・ブリッジ）で医員をさせていただき、念願叶い、2006年8月より米国は南カリフォルニア大学歯学部の附属研究機関である、頭蓋顔面分子生物学センターにて Dr. Songtao Shi のもと、博士研究員として研究生活におくらせていただきました。岡山大学での4年間の大学院過程では、デンタルインプラントの主成分であるチタンの生体への影響を細胞分子生物学的観点から研究させていただきました。窪木教授をはじめ多くの指導教官の先生方に厳しくも温かくご指導いただいたおかげで、米国に留学中も、研究に対する基本的な姿勢や考え方を評価していただき、6年間もの長期に渡り、同研究施設で研究に没頭することができました。米国では主に、さまざまな免疫系疾患（全身性エリテマトーデスや強皮症など）における間葉系幹細胞全身投与の治療効果について研究を行いました。間葉系幹細胞の全身投与治療は骨髄移植以来の大きな治療効果を持つ細胞移植治療として期待、注目を集めています。しかも、現在のところ骨髄移植で見られるような副作用も報告されていません。海外では基礎研究に基づいて、どんどん臨床応用の可能性につ

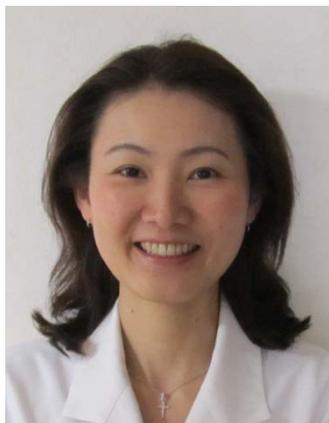


いて試行錯誤がなされています。残念ながら、日本での臨床応用にはまだまだ多くの基礎研究が必要になってきますが、少しでも質の良い基礎、または臨床前研究を日本から数多く発信することで、科学の進歩に貢献できるのではないかと考えております。

6年間、教育と臨床の現場から離れ、すっかり浦島太郎状態になりましたが、幸いなことに、岡山大学には、私が歯学部生だった頃からの指導教官の先生方（しかも厳しかった思い出のある先生方）がご活躍されています。残念ながら1診の学生には戻れませんが、気分も新たに、先生方のご指導ご鞭撻を賜りたいと思いますので、よろしく願いいたします。

## 「着任のご挨拶」

補綴科（クラウン・ブリッジ）  
水口 真実



この度、平成24年4月1日付けで岡山大学病院補綴科（クラウン・ブリッジ）の助教に着任いたしました12期生の水口真実です。この場を借りて皆様にご挨拶申し上げます。

私は岡山大学を卒業後、旧第一補綴科に入局し、研修医、医員として計5年間勉強させていただきました。その後、夫の留学に同行し2年間渡米。帰国後平成16年から、岡山市内の青木内科小児科医院、あいの里クリニックで勤務しておりました。

私が勤務した診療所では、一般の外来歯科診療の他、半数は病院、在宅、関連施設への往診、介護保険下での口腔管理、地域の方への啓発活動等を行っていました。急性期病院を経て、回復期病棟、地域の老健、特養、グループホーム等の施設、在宅などで過ごす方々を目の前にして、歯科に求められることは、私たちが学生時代に学んだことから大きく離れていることもあり、歯科の知識だけでは解決できない問題にも多く直面しました。「人生の最期」、「口腔の最期」を見る機会が多くありました。「歯医者」に何が求められているのか、何をしなければならないのか、そして何ができるのか、常に考えさせられる日々でありました。

地域医療を支える歯科医師として、「ワーク3兄弟」つまりフットワーク、チームワーク、ネットワークの大切さを常に感じております。多職種連携、病診連携が叫ばれる昨今、連携の重要性は医療現場では必然です。生活を支える主治医と連携し、看護師、薬剤師、栄養士、歯科衛生士、リハビリ専門職、ヘルパー、そして何より本人、家族。チームを作り、その方が地域の生活に戻れるよう他施設とも情報を密にし、ネットワークを構築する。地域をあげて、その方の生活を守るという使命が医療者にはあり、歯科医師はその一員として役割を担わなければならないと、強く思っています。

今回の大学外からの助教への着任は、異色のことだと思います。2010年に岡山大学病院に設立された医療支援歯科治療部にも一部ではありますが、出席させていただけるとのことでお話を頂きました。急性期から関わり、地域での生活へ戻っていくお手伝いができるよう、邁進したいと思っております。

未熟な私ではありますが、今後も臨床、教育等に精進するのはもちろんのこと、人との繋がりを大切に日々研鑽していきたいと思っております。ご指導、ご鞭撻を賜りますようお願い申し上げます。

## 「着任のご挨拶」

顎口腔再建外科学分野  
水谷 雅英

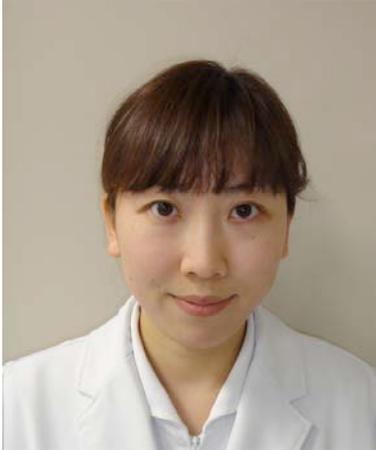
このたび、平成22年4月1日付けで岡山大学大学院医歯薬学総合研究科・顎口腔再建外科学分野の助教に着任いたしました。この場をお借りして皆様にご挨拶を申し上げます。

12期生として岡山大学に在籍し、卒業後は大阪大学大学院歯学研究科 口腔外科第一教室に入局させて頂き学位を取得させて頂きました。診察も研究もついて行くことだけで精一杯でしたが、歯科医療に対する考え方や科学的なものの見方を勉強させていただきました。学位取得後は奥羽大学歯学部附属病院の助教として3年間、教育と口腔外科臨床に携わらせて頂きました。大学院の4年間と奥羽大学の3年間は、研究や臨床と仕事面だけでなく色々な面で非常に勉強となった7年でした。その後は地域中核病院である大阪労災病院で、5年間、癌治療を始め、重症感染症、外傷など一般口腔外科の研鑽を積み、口腔外科学会認定専門医を取得させて頂きました。森ノ宮病院では地域医療との連携を学び、大阪府立母子保健総合医療センターでは世界有数の口唇口蓋裂治療をみさせて頂きました。自分の身に余る臨床経験を積み、臨床に関しましては多少の自信もついてきました。この度、岡山大学大学院医歯薬学総合研究科の助教を拝命し、岡山に帰ってくることになりましたが、少しでも岡山の歯科医療に貢献出来ますようがんばらせて頂きたく思っております。15年ぶりですので、変わった事やわからない事が多々ありご迷惑をおかけすることもあるかと思いますが、ご指導、ご鞭撻を賜りますよう宜しくお願い申し上げます。



## 「着任のご挨拶」

小児歯科学分野  
高島 由紀子



この度、平成 24 年 4 月付けで岡山大学大学院医歯薬学総合研究科小児歯科学分野の助教に着任いたしました。

私は、平成 19 年に広島大学歯学部を卒業後、大阪大学歯学部付属病院にて研修医として入局いたしました。その後、大阪大学大学院歯学研究科分子病態口腔科学専攻先端小児口腔保健学分野の大学院生となり、研究および小児歯科臨床を学ばせて頂きました。平成 24 年 3 月に博士課程を修了した後、岡山大学に赴任することとなりました。

大学院では、*Streptococcus mutans* によるバイオフィルム形成に関する分子生物学的な研究を行ってきました。主な研究内容は、バイオフィンフォマティックスの手法を用いた *Streptococcus mutans* の表層タンパクの機能解析であり、タンパクの高次構造を構築することにより、機能領域を推定し分析するものです。これまでに、グルカン結合タンパクのひとつである GbpC についての研究を行い、この研究の成果が学位論文となりました。今後はさらに、それ以外のタンパクの機能領域の特定なども行っていきたいと考えています。

臨床については、子どもの齲蝕は全体的には減少してきてはいますが、いまだに齲蝕の多い子どもがみられ、齲蝕罹患の 2 極化が進んでいるようにも思われます。健全な永久歯列の完成を目指し、乳歯列における齲蝕のコントロールに重点を置きながら、臨床に携わっていきたいと考えております。

これまでは、教育を受ける側の立場でしたが、これからは教える側として全力を注いでまいりたいと考えております。経験も能力もまだまだこれからの点も多いとは思いますが、大学での臨床経験や大学院で得た研究の知識と技術をもとに臨床・研究・教育の一つ一つを自分なりに模索しながら貢献していきたいと思っております。末筆ながら、今後とも一層のご指導とご鞭撻を賜りますようよろしくお願い申し上げます。

## 「着任のご挨拶」

歯科矯正学分野  
片岡 伴記

2011年4月1日付けで岡山大学大学院医歯薬学総合研究科・歯科矯正学分野の助教に着任いたしました片岡伴記と申します。

ご挨拶を兼ねまして自己紹介をさせていただきます。私は嘗て東京の大学で経済学を勉強し、その後、北海道医療大学歯学部に入部し、歯科医師への道に進んだという、少し変わった経歴を持っております。思えば、こちらに来るまでは人生で紆余曲折を繰り返してきました。北海道医療大学を卒業後は岡山大学大学院医歯薬学総合研究科・顎口腔顔面矯正学分野（当時）に進学させていただきました。同大学院では矯正歯科領域の臨床を勉強させて頂くとともに、顎口腔機能と骨格形態に関する研究をしております。

本学での忙しい日々でも時には挫折の危機に陥ることもございましたが、山城教授、上岡准教授、川邊講師をはじめ他の助教の先生方のご指導により、私のようなものでも無事歯学博士を修了することができました。また、臨床では日本矯正歯科学会の矯正認定医を取得することもできました。本学に入学・入局させて頂き、大変有意義な臨床・研究生活を過ごすことができ、今でも感謝の気持ちでいっぱいです。

4月からは助教として大学院生の臨床や研究を指導する立場となり、嘗て私にご指導くださった先生方のご苦勞を身にしみ感じております。まだまだ半人前の私ではございますが、本学の発展に少しでもお役に立てますように、臨床と研究を上手に両立させ、後進の指導をしていく所存ですので、今後ともご指導・ご鞭撻ほど宜しくお願い申し上げます。



亀

「着任のご挨拶」

予防歯科  
丸山 貴之



このたび、平成24年4月より岡山大学病院予防歯科助教に着任いたしました、22期生の丸山貴之と申します。

私は、6歳まで岡山で、小学校時代は神戸で、中学・高校時代は京都で過ごし、18歳の時に岡山大学歯学部へ入学し、6年間の大学生活、1年間の歯科医師臨床研修、4年間の大学院生活を送りました。歯学部入学当時の歯科に対するイメージは、「むし歯を削ってつめる」、「痛い」というものでしたが、予防歯科の講義を通して、「できるだけ自分の歯を残して人生を送る」ことの大切さや、「う蝕や歯周病は生活習慣病の一つで予防が可能である」という考え方に共感し、大学院では予防歯科学を専攻しました。

臨床においては、予防歯科での診療とともに、頭頸部がんをはじめとする入院中の患者さんの口腔ケアをさせていただく機会を得ました。心のケアを含めた歯科診療は難しいものがありますが、試行錯誤しつつ努力していきたいと思っています。また、他施設との交流を通じて、より発展していけたらと思っています。

4月からは臨床・研究とともに、教育という新たな責任が加わってまいります。自分の大学時代はどちらかといえば受け身教育で、不真面目な学生でしたので、大学を卒業して改めて講義を聞くと、学生時代にもっと勉強しておけばよかったと後悔しています。これからは教員として、学生が興味を持って主体的に学ぶことができるようにサポートしていきたいと考えています。

今後ともご指導・ご鞭撻賜りますよう、よろしくお願い申し上げます。

## 「着任のご挨拶」

歯科放射線学分野  
畦坪 輝寿

平成24年4月1日付で歯科放射線学分野助教に着任いたしました畦坪輝寿です。  
よろしくお願い致します。

私は、平成17年に岡山大学歯学部を卒業後、岡山大学大学院医歯薬学総合研究科歯科放射線学分野の大学院生として4年間、歯科放射線科レジデントとして1年間お世話になりました。研究は口腔扁平上皮癌の腫瘍増殖能、腫瘍内血管新生と Dynamic MRI のパラメーターとの関連性について免疫組織学的な検討をおこなっていました。

その後2年間、兵庫県姫路市の姫路聖マリア病院で一般歯科診療に携わらせていただくこととなり、臨床一辺倒の毎日を過ごしてきました。総合病院の中の歯科でありましたので、他の医科の先生方から色々なことを教わり、また違った視点から歯科という診療科について学び、考えることができた大変有意義な2年間でした。

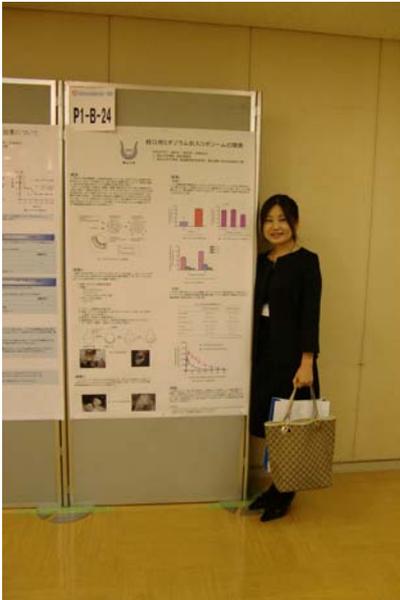
このたび岡山大学に復帰するにあたり、Dynamic MRI の研究を継続するとともに口腔癌の放射線治療についても学び、おこなっていきたいと考えております。

またそれら研究、臨床に加えて、これからは学生教育という重責も果たさなければなりません。私は卒後8年目になりますが、大学生当時どのように感じ、学んでいたかを考えてみますと楽しかったこと、苦しかったことなど多くのことが思い出されますが、もっとこういうことを勉強していればよかったなどと後悔することが多いのが現状です。こうした経験を少しでも学生たちに伝えることができるような教育ができればと考えております。

最後になりましたが、岡山大学歯学部のため微力ながら全力で頑張っていく所存でございますので、今後ともご指導、ご鞭撻のほど賜りますよう、よろしくお願い致します。

## 「着任のご挨拶」

歯科麻酔・特別支援歯学分野  
友安 弓子



平成24年4月1日付で歯科麻酔・特別支援歯学分野助教に採用されました18期生の友安弓子と申します。よろしくお願ひ致します。

ご挨拶を兼ねまして、自己紹介をさせていただきます。

私は滋賀県で生まれ育ち、高校は滋賀県立膳所高校です。滋賀県出身だというと、「ほとんど琵琶湖だよ」とよく言われますが、実際の琵琶湖の面積は6分の1で水平線がみえる海のような湖の周りには現在約141万の人が住んでいます。膳所高校は元藩校で文武両道を大切にしています。私も高校時代はテニス部に所属し、部活動以外にも朝練や自主練に励んでいました。岡山大学歯学部に入學後、2003年に卒業し、研修センターで1年間研修をした後、福山にある中国中央病院の歯科口腔外科の研修医として赴任しました。そこは11診療科、約280床の公立学校共済組合で運営されている病院です。口腔外科は部長と二人体制で外来と入院をこなしていました。ほぼ常時6-8人いる入院患者の管理や救急対応で、24時間・365日拘束される日々が2年間続きました。福山市において唯一の口腔外科を掲げる病院ということで、難抜歯だけでなく、悪性腫瘍や外傷、ありとあらゆる口腔外科患者を診ていました。歯科麻酔科からの出張でしたが、どっぷり口腔外科を学べ、また他科の先生方にもよく可愛がって頂き、とても貴重で有意義な経験を積むことができました。

2006年4月から岡山大学大学院医歯薬学総合研究科歯科麻酔学分野（現：歯科麻酔・特別支援歯学分野）博士課程の大学院生として戻ってきました。大学院在学中は、宮脇卓也教授と細胞化学分野の保田立二教授にご指導を頂きながら研究に励みました。博士課程修了後、歯科麻酔科の医員を経て現在に至ります。研究の内容は、鎮静を目的とした前投薬として知的障害者や小児でよく用いられるミダゾラム注射薬の経口投与時の苦味を改善するために、ミダゾラム注射薬をリポソームで封入するというものです。リポソームは生体組織の成分で構成されているため、安全であり、薬物を封入したリポソームは薬物担体として臨床応用もされています。今回の研究でミダゾラムのリポソームへの高い封入率と安定性を有したミダゾラム封入リポソームを開発することができ、またウサギを用いた動物実験でもその薬物動態を確認でき、臨床応用への可能性が示唆されました。大変有意義な研究テーマを与えて頂き、ご指導いただけたことに感謝いたします。また日本歯科麻酔学会においても、この研究発表に対してデンツプライ賞を頂けたり、多くの先生方から「非常に興味深く、臨床応用できるよう期待している」と激励のお言葉を頂けたことから臨床応用につながるよう今後も実験を継続していきたいと強く感じております。

この度助教に採用され、これまでの研究や臨床に加えて「教育」という仕事に携わることになり、その責任の重さを感じております。私自身精進しながら、学生や研修医の指導をさせていただこうと思っておりますので、今後とも、ご指導ご鞭撻を賜りますよう、宜しくお願い申し上げます。

この度助教に採用され、これまでの研究や臨床に加えて「教育」という仕事に携わることになり、その責任の重さを感じております。私自身精進しながら、学生や研修医の指導をさせていただこうと思っておりますので、今後とも、ご指導ご鞭撻を賜りますよう、宜しくお願い申し上げます。

## 「近況報告」

大阪医科大学 口腔外科学教室  
教授 植野 高章

岡山大学歯学部 of 皆さんお元気でしょうか。2011年9月に福井大学より大阪医科大学に赴任し、あっという間に6ヶ月が過ぎました。大阪医科大学は大阪府北摂地区の高槻市にあります。近隣には茨木市、吹田市、枚方市、長岡京市などがあり、北摂地域の口腔外科の中核病院として周辺歯科医師会と密接な医療連携を行っています。大阪医科大学の教室員は、外来、病棟、研究のレギュラーメンバーが25名、関連病院の勤務医などを合わせると約50名からなります。不慣れなトップをしっかりと支えてくれる頼もしいメンバーばかりです。

私の運営する大阪医科大学口腔外科学教室は、岡山大学口腔外科学教室と同様に非常に古い歴史を持つ教室です。初代小野尊睦教授、2代目小野克己教授、3代目島原政司教授、そして4代目に私が就任しました。同門会員も多く、年に2回の教室同門会学術大会が行われ、同門会員、周辺歯科医師会、医師会からも多くの会員が参加し、北摂地区の歯科医学の臨床研究拠点となっています。

私は2009年2月に20年間勤務した岡山大学歯学部から福井大学医学部に移りました。そして今回の大阪医科大学と、長く勤務した歯学部から医学部に移って最も強く感じた事は、医学部に属する多種専門職と歯科サイドの医療連携の重要性です。医療安全管理、院内感染対策、摂食嚥下チームなどを例にあげても、非常に多くの多種専門職員が診療に関わってきます。彼ら多種専門職員と共通の認識と言語で一定レベルのコミュニケーションを取らねば、円滑なチーム医療は行われなくなります。特に歯科は他科からはわかりにくい診療科ですから、こうしたコミュニケーションの努力を怠ると気がついた時には視野の狭い歯科医、口腔外科医になってしまいかねません。私は、教室員に歯科・口腔外科専門医師として医科多種職専門医との知識と技術の温度差がないようにしっかりコミュニケーションを取ること、そして医科の中で必要とされる歯科医療を実践するように指導しています。

岡山大学歯学部におきましても、これからは医科との連携を重要視しつつ世界でもトップクラスの歯科医療を学生に教育していかねばならないと思います。特に口腔外科は、



医科と歯科の間にあるグレーゾーンです。この分野では、われわれの先輩が積み重ねてきた実績をしっかりと見詰め直し、医科からも専門職として評価される知識と技術を誇れる岡山大学歯学部であって欲しいと思っています。皆様方のご活躍をお祈りしております。

## 「転任のご挨拶」

徳島大学大学院ヘルスバイオシステム研究部 予防歯科学分野  
玉木 直文



平成 24 年 4 月 1 日付で、徳島大学大学院ヘルスバイオサイエンス研究部予防歯科学分野の准教授に転任することになりました玉木直文です。私は、岡山市生まれの岡山育ちという生粋の岡山っ子です。岡山大学歯学部卒業後、岡山大学大学院歯学研究科予防歯科学の大学院生となり、渡邊達夫名誉教授のご指導のもとで学位を取得させていただきました。その後に同講座の助手、助教を経て講師をさせていただきましたが、この度、縁あって徳島大学に行くことになりました。岡山では出会いに恵まれ、予防歯科学分野の皆様や同門の先生方をはじめ、周りの皆様に支えていただきました。ご挨拶を述べるにあたり今までの人生を振り返ってみると、実に様々な方とのご縁のお蔭で、今の私がここにいると痛感いたします。

今回、徳島大学に行くことになりましたのは、徳島大学大学院予防歯科学分野の伊藤博夫教授からお声をかけていただきましたことから始まります。森田教授からもお口添えいただき、准教授選に応募させていただきました。公募であり、他にも候補がいたとのことですが、2月の教授会で私が選ばれたとの連絡がありました。

思い起こせば予防歯科に入局しようと思ったのは、学生時代に聞いた渡邊名誉教授の講義がきっかけです。「病院に来る患者は全体の1%に過ぎないが、今はその少ない人数を奪い合っている。しかし、口腔衛生（公衆衛生）が相手にするのは残りの99%の人たちである。」といった内容だったと思います。当時3年生だった私は、これを聞いて衝撃を受けたのをいまだに覚えています。卒業後は当たり前のように開業するものと考えていたのですが、こんな道もあるのだなと思いました。疾病を抱えて来院する患者を治すことは、勿論すばらしいことです。しかし、今は健康で問題はないけれども、将来的に疾病にならないように「予防」していくということも面白いのではないかと考え始めました。その後、診療、教育、研究を行う日々を過ごしておりますが、今もこの考えは変わっておりません。

最近、診療や教育に追われる日々を送っております。そんな中で、酸化ストレスというものに着目して研究を行ってきました。酸化ストレス状態を起こす活性酸素種というものは、生体の防御反応の一つでもあります。しかし、過剰に産生されるとDNA、脂質やタンパク質などを酸化させ、様々な病気を引き起こすと言われております。そこで、酸化ストレスと歯周病について、主に臨床研究を行ってきました。

福沢諭吉の学問のすすめに「活用なき学問は無学に等し」とあります。自己満足だけの研究を行うこと無く、人の役に立つような研究をしていきたいと常々思っております。予防歯科の発展に寄与し、ひいては歯学の発展につながるよう、微力ながらも日々精進していきたいと思っております。まだまだ准教授となることの自覚が足りない私ですが、

今までに得た知識や経験をもとに、研究や教育に精進するのはもちろんのこととして、今後とも人との繋がりを大切に、日々研鑽していきたいと考えております。

徳島は、言わずと知れた阿波踊りが有名です。私自身は、まだ見たことがありません。もしかしたら参加させてもらえるかもしれませんし、今からとても楽しみにしています。また瀬戸内海に面しており、鯛などの魚介類といった自然の恵みが豊富で美味しいそうなので、これまた楽しみです。

最後になりますが、岡山大学の皆様のご健勝とご多幸をお祈り申し上げますとともに、この度、このような機会を与えて下さった編集委員の先生方にも御礼申し上げます。また、渡邊達夫名誉教授、森田学教授をはじめ、数々のご指導、ご高配を賜りました諸先生方に、この場をかりて厚く御礼を申し上げたいと思います。

## 「転出のご挨拶—もっと大きな岡山大学歯学部“愛”—」

大阪大学大学院歯学研究科 顎口腔機能再建学講座  
歯科補綴学第一教室  
峯 篤史



岡山大学歯学部の皆様におかれましては、ますますご健勝のこととお喜び申し上げます。平成 24 年 3 月まで岡山大学でお世話になり、4 月から大阪大学大学院歯学研究科 顎口腔機能再建学講座（歯科補綴学第一教室）（主任：矢谷博文教授）の助教を務めさせて頂く予定になっております。これまで多くの先生方に大変お世話になりました。この場をお借りして御礼申し上げます。誠にありがとうございました。

前号の「歯学だより」ではインプラント再生補綴学の助教に着任（平成 22 年 1 月 16 日付）したご挨拶として、「着任のご挨拶 —心の内を見つめ、心に火をつける—」と題し、それまでの経歴と決意を記す機会を頂きました。その結びに「“人と人とが深く信じあい、ひびき合う。そして高いレベルの仕事と勉強をする。”岡山大学歯学部はそういう所であってほしいと願い、自分もそれを達成・維持する役割を担っているという誇りを胸に、日々気張っていきたいと思います。」と綴りました。

今回は、その後の 2 年 3 カ月間を振り返りたいと存じます。

教育に関しては、5 年次生模型（基礎）実習のライター長を務めさせて頂いたことが大きな経験になりました。その責務の重さと自分の非力さに、強く深く悩み続けました。

まず、実習を始めるに際し、以下の 3 点を基本精神としました。

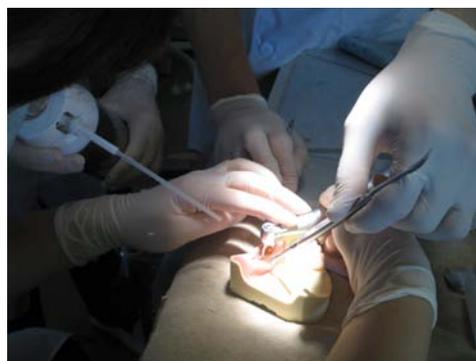
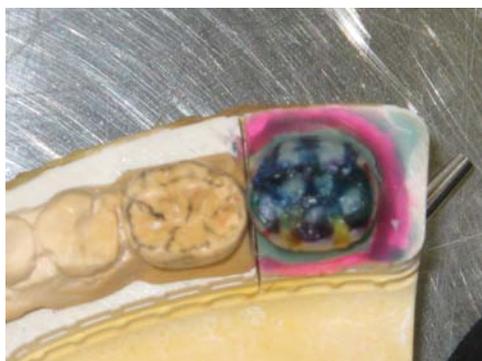
①本実習は臨床実習直前の基礎実習である。よって、より臨床（＝診療室）を意識してもらおう。

②人には能力に差がある。それでも何とかしないとイケない現実があることを実感してもらおう。

③今の時代に正当な範囲で、最大限に厳しい実習にする。それによって、より多くのより強い成功体験を蓄積してもらおう。

そして、一つの試みとして“ピアライター”という言葉を使用しました。「ピア(peer)」という単語には「仲間の」と言う意味があり、一般的に使用されている単語はピアサポートです。ピアサポートとは、同じような立場の人（＝学生）の間で助けることを目的としたシステムです。つまりこの度は、ある実習内容が合格ラインに達した学生さんを“ピアライター”として任命し、まだ達成していないクラスメートを我々ライターと共に指導しました。

この実習を終えて、「教育とは、その人が必ず克服できる最大限のストレスを与えること」と考えるようになりました。その実行のためには、教育する側も切磋琢磨し、その時代のベストの状態であることが求められます。そして、その時代のベストを模索するということは、「次世代のスタンダードを創る」ということになります。



臨床に関しては、以前から担当させて頂いていた歯科金属アレルギー外来や研究分野（接着歯学・レーザー歯学）とリンクする治療に力を注ぎました。それに加えて、引き継ぎの縄稚先生が進んでいた、NST（栄養サポートチーム）や PERIO（周術期外来）に属し、医科との連携を担う機会が増えました。以前の自分は「チーム医療」という言葉に素晴らしく温かいイメージ、一言で表すと“和気藹々（あいあい）”というイメージしか持っておりませんでした。しかしながら今回の経験から、その裏側の厳しさを感じるようになりました。その厳しさとは、大切なことを的確に判断し、より早くより良く対応し、人に必要とされることが重要であり、それが出来ない者や団体は淘汰されるという面もあるということです。つまり『私の信じる道、私のやり方は、誰がどう言ってもこうだ！』は、許されない。」ということです。その一方で、多くの他職種の方々と馴染みの仲（飲み仲間？）になり、他職種の皆さんはとても優しく歯系のスタッフを受け止めて下さっている事実も感じる事ができました。

研究に関しては執筆活動に専念し一定の成果を得ましたが、「論文はたくさん持っているようだけど、何の研究をしてるの？」と問われる機会も度々ありました。これはまだまだ自分が研究者として足りていない証であり、“大学”というアカデミア機関に所属するに値する人間となるよう、臆せず、さらなる研鑽を積みたいと決意しております。

この2年間3カ月で、自分は以前にも増して“岡山大学歯学部”のことを思うようになりました。これは皆様に支えて頂き、育てて頂いた感情であり、心を込めて本執筆のサブタイトルと致しました。

今後とも、変わらぬ御指導御鞭撻のほど、何卒よろしくお願い申し上げます。

平成 24 年 3 月

## 「転出のご挨拶」

鳥取大学医学部口腔顎顔面病態外科学講座  
本城 正



岡山大学歯学部の皆様におかれましては、ますますご健勝のこととお喜び申し上げます。私、本城 正は平成 24 年度から鳥取大学医学部口腔顎顔面病態外科学講座に所属することとなりました。

私は平成 11 年に岡山大学歯学部を卒業し、そのまま大学院生として岡山大学歯科矯正学分野に在籍した後に、米国ピッツバーグ大学への留学を経験させて頂き、平成 18 年から再度、岡山大学歯科矯正学分野所属となりました。岡山大学在籍中は、たくさんの先生方にお世話になりました。この場をお借りして御礼申し上げます。ありがとうございました。

ございました。

鳥取大学医学部は、昭和 20 年 3 月に米子医学専門学校として開設され、昭和 23 年 2 月には米子医科大学となり、昭和 24 年 5 月には国立大学設置法により鳥取大学医学部として現在に至っています。その中で、診療科として歯科口腔外科が正式に発足したのは昭和 42 年で、昭和 57 年には講座が開設されました。以来、診療科が開設されて 45 年、講座が開設されて 30 年の長い歴史をもっています。

医学部歯科口腔外科における矯正医の役割として口唇口蓋裂や顎変形症また症候群患者に於ける集学的治療の 1 つとしての歯の矯正のみならず顎顔面の異形成に対する顎顔面矯正にも積極的に関与していくことが期待されております。さらには鳥取大学歯科口腔外科は鳥取県における歯科治療の基幹的な病院として山陰各地の関連病院を多数派遣先として持ち、これまで地域的に矯正医が少なかった地域の患者さんが矯正治療の恩恵を受けられるようになることが考えられます。

鳥取大学医学部は四方を中海、日本海と大山に挟まれ自然の豊かな米子市に設立されています。これを機会にインドア派の僕もアウトドアデビューかと考えております。野菜、果物、魚貝類といった自然の恵みは多く、特に魚介類は新鮮でその辺の回転寿司でも十分おいしいということです。岡山の皆様も是非遊びに来ていただけたらと思います。

「ペンシルベニアより」

インプラント再生補綴学分野  
内部 健太

現在、アメリカ合衆国のペンシルベニア州で留学生生活を送っております、20 期生の内部と申します。よろしくお願ひ致します。私は 2005 年に岡山大学を卒業後、大学院に進学し、現インプラント再生補綴学分野に入局致しました。大学院 2 年目から学位取得までの 3 年間は、東京にあります国立成育医療研究センター研究所に国内留学する機会を頂き、システム発生・再生医学研究部（浅原弘嗣部長）で研究活動をスタート致しました。岡山に戻ってからの 3 年弱を補綴科（クラウンブリッジ）医員として過ごし、2012 年 2 月より、Children's Hospital of Philadelphia Research Institute にて Post-Doctoral Fellow として研究に従事しております。

フィラデルフィアはアメリカで最も歴史のある街のひとつで、近代的な都市と豊かな自然が共存する、非常に美しい街です。また私の所属しておりますフィラデルフィア小児病院は、アメリカで最初に創られた小児病院で、現在でも小児医療のトップランナーとして世界をリードしています。このような素晴らしい環境で研究生活を送ることができる事を、とても幸せに感じるとともに、チャンスを与えて下さった方々に深く感謝致します。

渡米してまだ間もないため、現在は全く新しい環境へ自分を順応させる事に必死ですが、毎日非常に充実した生活を送っております。私はこれまで歯胚発生をメインに、発生生物学を研究の軸としておりました。留学した現在は、骨、軟骨、筋肉といった骨格形成と、これに異常を来す疾患のメカニズムの解明および治療法の開発が主なテーマとなっております。このように、留学をきっかけとして研究テーマと対象が変わりましたが、今後の自分の研究の幅を広げるという観点では、非常に良い機会であったと感じております。

このように、補綴科の人間である私ですが、大学院時代、そして今回の留学、いずれも小児医療機関で研究を行うという、変わった道を鋭意進んでおります。これは、常にユニークな存在でありたいと願う自分の希望ともマッチしますし、全ての研究は違うよ



うに見えて、真髄は同じである事の現れかもしれません。何れにしても、今自分のある環境で出来ることは精一杯やってみたいと思っています。そして、その結果が多少なりとも社会に貢献できるものであるように、努力したいと考えています。今後ともご指導の程よろしくお願い致します。

## 「岡山歯学会 優秀論文賞を受賞して」

歯科薬理学分野  
十川 千春

この度は、“Expression and Function of Variants of Human Catecholamine Transporters Lacking the Fifth Transmembrane Region Encoded by Exon 6. PLoS ONE, Volume 5, Issue 8, e11945: 1-13, 2010.” において、岡山歯学会優秀論文賞をいただき、大変光栄に感じております。岡山歯学会会員の先生方にこの場をお借りしてお礼申し上げます。

神経伝達物質トランスポーターは、神経終末より遊離された神経伝達物質を再取り込みすることによりその神経伝達を速やかに終結させる役割を担う細胞膜輸送体蛋白質です。ドパミントランスポーター (DAT)、ノルエピネフrintランスポーター (NET) はカテコラミントランスポーターとよばれ、抗うつ薬のような临床上重要な薬物のターゲットとしてだけでなく、コカインや覚せい剤等社会的に問題となる乱用薬物のターゲットとしても知られています。歯科薬理学分野ではこれまで、カテコラミントランスポーターの構造・機能・発現とその調節機構について研究を行い、選択的スプライシングにより生じる種々のバリエーションを見出し報告してきました。この度の受賞論文は、DAT、NETに共通する選択的スプライシングにより生じるアイソフォームの発見とその機能発現の詳細な解析結果と、バリエーションの膜トポロジーを明らかにし、そのユニークな構造と機能を示した最初の論文です。

近年、神経伝達物質トランスポーターは、神経活動に応じてその発現がダイナミックに調節されていることが明らかとなり、その発現調節機構について多くの研究が進められています。今回発見した選択的スプライシングにより生じるアイソフォームの機能解析をもとに、発現調節の一つである転写後 RNA 修飾機構の解析を今後も進めていきたいと考えています。先にも述べたように、カテコラミントランスポーターは抗うつ薬のターゲットですが、抗うつ薬はまた、慢性疼痛の治療薬としても利用されています。病態時の神経変化に伴ったカテコラミントランスポーターの発現調節は、うつ病や慢性疼痛治療における抗うつ薬に対する感受性と関連している可能性が示唆されます。また、今回報告したアイソフォームは白血球に多く発現することから、免疫調節にも関わっている可能性があります。今回の受賞を励みに、様々な病態時におけるカテコラミントランスポーターアイソフォームの発現と機能調節について今後さらに研究を進めていきたいと思っております。ご興味のある方がおられましたらいつでもお声をかけて下さい。分野を超えて共同研究が出来ると大変うれしい限りです。

最後になりましたが、ご指導頂きました北山滋雄教授、十川紀夫准教授をはじめ、ご協力いただきました多くの共同研究者の先生方に深謝致します。

「岡山歯学会奨励論文賞を受賞して」

口腔顎顔面外科学分野  
奥井 達雄

この度は岡山歯学会奨励論文賞に選出していただき、選考委員の皆様、岡山歯学会学会員の皆様に大変感謝しております。今回、以下の論文が受賞対象となりました。

“Tatsuo Okui et al : Anti-tumor Effect of Temsirolimus against Oral Squamous Cell Carcinoma Associated with Bone Destruction. *2010 Molecular Cancer Therapeutics*”

私は岡山大学大学院医歯学総合研究科口腔顎顔面外科顎分野にて mammalian target of rapamycin (以降 mTOR) の口腔癌進展における役割に関して研究して参りました。mTOR は増殖因子からのシグナルや栄養状態に対し、翻訳や転写を介して細胞の分化、増殖生存を制御する約 290kDa の巨大なセリンスレオニンキナーゼです。近年種々の癌細胞、癌組織における mTOR の異常発現が病態と相関している事が報告され mTOR 阻害薬の研究が進んでおります。現在 mTOR 阻害薬は腎細胞癌、骨肉腫などにおいて臨床適応が進んでおります。また mTOR は骨吸収を促進する破骨細胞にも強く発現していることが知られており破骨細胞前駆細胞の分化や成熟に関与することが報告されています。我々が治療対象とする口腔癌は骨組織に近接して発生し、癌細胞が破骨細胞分化を促進する TGF- $\beta$  や VEGF といった増殖因子を産生するため、比較的早期の stage においても骨破壊が引き起こされることが知られております。しかし mTOR を高発現する癌細胞と破骨細胞により引き起こされる癌骨破壊病変に関する mTOR の研究は全く行われていませんでした。そこで私は口腔癌骨破壊モデルにおける mTOR の役割ならびに mTOR 阻害薬を用いた新規口腔癌治療に関する研究を行う事といたしました。

多くの癌細胞において mTOR が高発現することは既知の事実であり、口腔癌軟組織腫瘍モデルマウスにおいても mTOR を阻害することで腫瘍の増殖を抑制することが確認されました。さらに口腔癌が産生する増殖因子による破骨細胞誘導における mTOR の役割を検討し、PTHrP (腫瘍細胞が産生する副甲状腺ホルモン関連タンパク) による破骨細胞誘導を mTOR 阻害薬が抑制することを見いだしました。この結果は mTOR を阻害することにより癌細胞増殖を抑制するだけでなく破骨細胞の分化、成熟を抑制する可能性がある事を示唆しております。この研究は基礎研究と臨床研究のトランスレーショナルリサーチであり、臨床医である私にとって非常に意義深いものでした。口腔癌は発生部位がアプローチしやすいため、外科切除が基本であります。切除範囲によっては著しく患者の QOL が低下します。今後、上記のような分子標的治療薬の創薬、改良により患者 QOL の向上と治療成績の両立が高いレベルで実現できる事が何よりの願いであります。現在私は Akt や HIF1 $\alpha$ 、VEGF を client protein とする分子シャペロンである Heat Shock protein90 (HSP90) や LAP、ALK を受容体とし Src を活性化する Midkine といった oncogenic protein をターゲットとした癌分子標的治療ならびに血管新生阻害に関する検討を行っております。

最後になりましたが、さまざま機会を与えて頂きました口腔顎顔面外科学分野、佐々木朗教授、志茂剛助教、川崎医科大学総合外科、猶本良夫教授ならびに御指導、御協力いただいた多くの共同研究者の方々にこの場をお借りして厚く御礼申し上げます。

2012 3.12



## 「岡山歯学会 奨励論文賞を受賞して」

予防歯科学分野  
竹内 倫子



この度は岡山歯学会奨励論文賞に私どもの論文を選考して頂き、岡山歯学会会員の先生方に大変感謝いたします。受賞の対象となったのは、” Takeuchi N et al. Relationship between the prognosis of periodontitis and occlusal force during the maintenance phase—a cohort study. J Periodontal Res. 2010 45(5): 612-617. ”です。この賞をいただきました事を大変光栄に思っております。

本論文は私の学位論文です。咬合力と歯周病の進行に着目したものです。

岡山大学病院予防歯科には歯周基本治療後や口腔機能回復後に歯周組織の状態を維持するために多くの方が受診されています。つまようじ法を中心に歯周病の再発/進行予防を行っておりますが、完全に予防できないのが現状です。メンテナンス期の患者を対象にした研究では、歯周病進行のリスク要因として喫煙、ストレス、総菌数などが報告されています。しかし、臨床現場ではこれらの因子では説明がつかないことに出くわすことも多々あります。我々はこの研究以前に、横断研究により、歯周治療のメンテナンス期では歯周病の進行度と咬合力の間には有意な負の関連があることを報告しました。そこで、咬合力はメンテナンス期における歯周病進行を予測できるリスク因子になるのではないかと仮説を立て、縦断調査を行いました。その結果、調査開始時に咬合力が高い者と低い者の2群に分けて歯周病の進行状況を追っていくと、現在歯数や年齢を調整しても、調査開始時の最大GALが7mm以上の歯を1本以上有することと、低咬合力であるということが歯周病進行に有意に関連していたことが分かりました。「咬める」という環境作りが歯周病進行の抑制に期待できるかもしれません。

「8020 運動」という言葉が国民に周知されてきました。抜歯される原因の大部分がう蝕と歯周病ですが、医学が進歩してきたとはいえ、歯周病に罹患している人はいまだに全体で約 82.7% (平成 17 年歯科疾患実態調査) もいらっしゃいます。歯科を受診されている方はもちろんのこと、大多数の受診されていない方々の口腔環境がより良い状態でできるだけ維持できるよう、役立つ情報を発信していきたいと思っております。

この度の賞を励みに、より一層努力していきたいと思っております。受賞にあたり、大学院時代に様々な機会を与えてくださいました岡山大学名誉教授の渡邊達夫先生、現教授の森田学先生、前講師の山本龍生先生、直接指導して下さった江國大輔先生ら並びにご協力いただきました多くの先生方にこの場をお借りして心より御礼申し上げます。ありがとうございました。

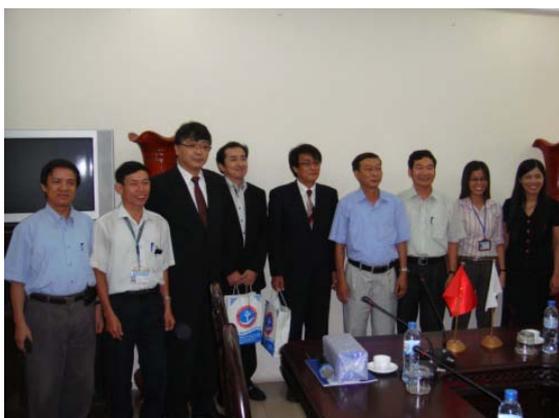
「海外援助 ～ハイフォン医科大学訪問について～」

顎口腔再建外科学分野  
高尾 香名

8月17日から20日まで、歯学部長の松尾教授、インプラント再生補綴学分野の窪木教授、顎口腔再建外科学分野の飯田教授に同行し、ベトナムのハイフォンに行ってきました。

ハイフォンはベトナムの首都ハノイの東約80kmに位置し、北部ではハノイに次ぐ規模の都市です。サイゴン港と並ぶ国際的なハイフォン港があり、近年は欧米や日系の企業の工場が数多く建ち、ベトナム北部最大の港湾都市となっています。ただ、岡山からハイフォン

までの道のりは遠く、関西空港からベトナム航空機を利用し、ホーチミン経由で約11時間かかります。(関西ーホーチミン：5時間、ホーチミンーハイフォン：2時間、トランジット：3時間)



までの道のりは遠く、関西空港からベトナム航空機を利用し、ホーチミン経由で約11時間かかります。(関西ーホーチミン：5時間、ホーチミンーハイフォン：2時間、トランジット：3時間)

ハイフォン市内にあるハイフォン医科大学歯学部は岡山大学歯学部と部局間交流協定を結んでおり、今回ハイフォン医科大学において、両学部間での今後の具体的な交流についての話し合いと、飯田教授による口腔外科の講演が行われました。今回の話し合いにおいて、ハイフォン医科大学の歯科医師の先生に岡山大学歯学部へ臨床研修に来ていただくプログラムや、逆に岡山大学歯学部の学生が ODAPAS の研修先としてハイフォン医科大学へ短期留学をすることなどが決定しました。その結果、本年度から早速 Pham Thanh Hai 先生と Luong Xuan Quynh 先生が11月から1月まで岡山大学へ来られ、窪木教授のもとで臨床研修を受けられて帰って行かれました。そしてその内の一人の Hai 先生は4月から本学の大学院生として留学されることが決まり、今後もこのプログラムは継続し、ますます両大学の発展に繋がっていくことが期待されます。

飯田教授による口腔外科の講演は、舞台横にはホーチミン氏の像とベトナム国旗が掲げられた立派な造りの講堂で行われました。ハイフォン医科大学歯学部の学生だけでなく、多くの大学職員が集まり、大盛況な中で行われました。外傷や口腔癌など口腔外科一般についての最新事情から専門分野の口唇口蓋裂の一貫治療や顎



変形症に対する仮骨延長術などの内容で、1時間30分に及ぶ講演となりました。スライドは事前にハイフォン大学側のご厚意でベトナム語に翻訳されており、長時間の講演にも関わらず学生や若い先生方は非常に熱心に講演を聞き入っていました。講演終了後は残念ながら、時間の都合で大学病院への訪問ができませんでしたが、非常に有意義な大学訪問となりました。



現在、ベトナムでは地方都市には貧困層が多く存在する一方で、都市部はODAや外国投資により着実に経済発展を遂げています。そんな中で国民の歯科医療に対するニーズも少しずつ変化してきており、ハイフォン市内でも歯科矯正治療を行っている人や審美歯科を宣伝した歯科医院のTV CMも見られました。今後、インプラントや外科矯正手術などを希望する患者も増加することが予想されます。しかし、ベトナム国内にはそれらを専門とした歯科医師が殆どおらず、必然的に日本などの海外での臨床研修を希望する医師が多く存在します。今回の話し合いの時にも、インプラントや外科矯正手術に興味を持つ若い歯科医師の技術習得に対する厚い志を感じとることができました。また、現在ハイフォン医科大学の歯学部には博士号を取るコースがなく、研究面でも日本の大学院への留学にとっても興味を持っているようでした。

今回のハイフォン医科大学訪問では、ベトナムの歯科医師の先生方の歯科医療に対する直向な志に触れることができ、自分自身も大変刺激を受けました。今後この協定を継続し発展させていくことが重要であり、今後の両大学にとってのさらなる発展に繋がっていくことを期待します。

今回のハイフォン医科大学訪問では、ベトナムの歯科医師の先生方の歯科医療に対する直向な志に触れることができ、自分自身も大変刺激を受けました。今後この協定を継続し発展させていくことが重要であり、今後の両大学にとってのさらなる発展に繋がっていくことを期待します。



## 「震災復興援助について」

岡山大学病院 東北医療支援 第7班

歯周病態学分野

大学院生 久保 克行

2011年3月11日に東北地方太平洋沖地震が発生してから、早くも1年が経過しました。未曾有の震災から復興の路を歩み始めている現在、未だ被災地には多数の被災者がおられるのが現状です。本震災発生後の昨年4月に岡山大学病院東北医療支援チームに歯科医師として参加しましたので、報告させていただきます。



岡山大学病院は、3月16日から4月21日の期間に、岩手県大船渡市や陸前高

田市の病院および避難所を中心にして医療支援を行ってきました。歯科医師および歯科衛生士は、第6班（3月31日）から参加しました。支援のニーズとしては、急性期外傷から劣悪な環境での内因性疾患の発症と悪化への対応に変化しつつある状態でした。過去の大地震の反省からも、震災後に時間をおいて亡くなる震災関連死（震災という特殊な事態が発生していなければ助かった可能性のある死亡の事）を防ぐことが重要であると考えられています。なかでも、最も多くの割合を占める原因は「肺炎」であることが分かっています。さらに、東北地方の気候はまだ寒い時期でありましたし、水を十分に使用できない状況であったことも考慮しました。そのため、歯科チームは「誤嚥性肺炎の防止」を考慮して、専門的口腔衛生管理の実施と啓蒙活動を中心に行って来ました。

また、地元の歯科医師会や保健師らと連携し、最新の避難情報やニーズを把握し、限られた時間の中で有効な支援になるように努めました。実際には、21日間で251人の避難者に対して医療支援を行いました。さらに、避難者だけに支援を行うだけではなく周囲の方も含めて専門的口腔衛生管理を行って、水が少ない状況下での口腔衛生管理の方法を広めたことで、効率よく支援を行えたと考えています。しかし、「我慢強い」という東北の方の気質や地域性のためか、または被災直後の心理のためか、うまくコミュニケーションを取ることができず、十分な支援を行うことができなかった部分がある事も事実です。地域性を考慮し、対応する部分が不十分だったかもしれません。今後の検討課題の一つと考えられます。

今回の地震による被害はあまりにも大き過ぎますが、悲観するだけでなく、今後起こりうる大きな災害に対してどう備えるかが重要です。自分が考える医療従事者としての対策は二つです。一つは支援に必要なものを準備しておく事です（専門的口腔衛生管理に関する備品の備蓄、配布資料の作成および災害時におけるマニュアルの作成）。もう

一つは、必要な情報を発信する事です。災害時の支援において、何が重要であり効果的かを多くの人に予め示しておくことが重要と考えています。

なお、詳しい内容は第 32 回岡山歯学会総会・学術集会にて「東日本大震災における岡山大学病院歯科の医療支援の実態と提言」と題して発表しており、その内容をまとめました ([http://www.hsc.okayama-u.ac.jp/dent/pamphlet/tohoku\\_support\\_dh.pdf](http://www.hsc.okayama-u.ac.jp/dent/pamphlet/tohoku_support_dh.pdf))。また、実際に行った専門的口腔衛生管理の方法は、YouTube に「災害時における少量の水を利用した口腔清掃法#1」 (<http://www.youtube.com/watch?v=y0q2c1gZzmo>) としてアップロードしてありますので、参考にさせていただければ幸いです。

最後に、亡くなられた方のご冥福をお祈りし、一日でも早い復興を切に願います。微力ながら、今後も支援を続けていきたいと思えます。

「東日本大震災における医療支援活動 ～ 歯科衛生士室 ～」

歯科衛生士室  
三浦 留美

H23年3月11日に起きました、東日本大震災に際し、当岡山大学病院は岩手県の要請を受け、第一班として、3月15日に救急科医師1名、ICU看護師1名、委託運転士2名が本院救急車に医療器材を搬入し岩手県庁へ向けて出発しました。



3月19日からの第2班以降は医師の増員、薬剤師の参加がなされ、岩手医科大学での支援活動から、県立大船渡病院での支援活動を行いました。

そして3月31日の第6班から、医療支援チームに歯科医師1名、歯科衛生士1名が加わり、大船渡市や陸前高田市で活動を行いました。

	歯科医師	歯科衛生士
第6班 H23. 3/31～4/3	高柴 正悟	三浦 留美
第7班 H23. 4/3～4/6	久保 克行	住吉 由季子
第8班 H23. 4/6～4/9	山城 圭介	樋口 夕紀子
第9班 H23. 4/9～4/12	神農 泰生	三浦 留美
第10班 H23. 4/12～4/15	岡崎 好秀	高橋 明子
第11班 H23. 4/15～4/18	神農 泰生	有田 泰子
第12班 H23. 4/18～4/21	海老沼 孝至	住吉 由季子



医師3名と薬剤師1名看護師1名は、この岩手県立大船渡病院で救急医療に当たり、私たち歯科衛生士と、歯科医師は、現地の避難所を車を使って巡回しました。

震災20日後でしたので、飲料水すらままならず、少量の水で行える口腔衛生方法を考えながら行いました。

第10班からは、避難所に日中は人がいなくなってきたこともあり、徐々に高齢者施設や、病院での活動を行うようになりました。3月31日から始まった、歯科の医療チーム参加は、4月21日の最終班まで続き、延べ7人の歯科医師と7人の歯科衛生士が現地の医療支援活動に関わりました。

支援内容の概略を以下に記します。

- 訪問した避難所、介護施設、病院は25施設以上。
- 対応した被災者数は248名。
- 避難所での内訳は総数71名 男性58% 女性42%
- 介護施設では総数61名 男性30% 女性70%
- 病院では総数116名 男性22% 女性78%
- 主な内容は、専門的口腔衛生指導等が4分の3以上、義歯の調整等が14件ほど
- 歯科医院紹介は4件ありました



今回の医療支援で、医療人であることの自覚、人との繋がり大切さ、現地での臨機応変な機敏さ等を学んで帰って参りました。

また、被災者の方々に口腔衛生に関する啓蒙活動を行う事や、他職種の方達へ「口腔の専門的ケア」方法を指導するという、重要な役割も担えたのではと感じております。

まだまだ現地では、多くの方々が、不自由な生活を強いられておられます。今後の一刻も早い復興と、被災者の方々の活躍を、当院歯科衛生士室全員、心より願っております。



## 「歯科医師卒後臨床研修の役割を考える」

岡山大学病院 総合歯科  
鈴木 康司

臨床研修の目的は、患者中心の全人的医療を理解し歯科医師としての人格を涵養すること、基本的・総合的な歯科診療能力を身につけ、臨床研修を生涯研修の第一歩とすることです。歯科医療の質的向上を目指すものであり、国民からの至上命令であると理解しています。歯科医師卒後臨床研修の必修化からまもなく6年が経過しようとしています。これまでを振り返って今一度臨床研修の役割を考えてみたいと思います。

毎年様々な大学で6年間の学部教育を修了した歯科医師1年生60余名が岡山大学病院の研修歯科医としてやってきます。予測していたことではありますが、研修歯科医の臨床能力には驚くほど差があり、臨床研修を必修化した厚生労働省の真のねらいでもあるのかもしれませんが、必然的にボトムアップを目指さざるをえない状況でした。能力差の大きい研修歯科医に対する効率的、効果的な教育システムの構築をめざし、結果として独自の電子ポートフォリオシステム「Resident」の開発に至りました。これにより、研修歯科医の思考、やる気などをつかみとることができ、また個々への的確なフィードバックができるようになったと思います。このシステムは今後もさらに発展させていきたいと考えています。

必修化の弊害とでも言えるのかもしれませんが、ここ数年臨床実習を十分行わずに卒業してきたと思われるような研修歯科医が増えているように感じられます。歯学教育モデルコアカリキュラムでは、臨床参加型実習を推奨しており、卒前臨床実習で習得することが望まれる項目が数多くあるにもかかわらず、そのほとんどを卒後臨床研修で習得するという研修歯科医にとっては実にもったいない時間の使い方をしていて感じてしまいます。本来であれば、学部教育で習得した知識、技術を有機的に統合し、一口腔単位、全人的、総合的診療能力を養うべき期間であるはずなのですが、ごくベーシックな診療技術の習得に目がいてしまいがちです。とはいえ岡山大学歯学部出身者は、他大学出身者に比較して臨床実習で習得した項目が明らかに多く、臨床研修においてはアドバンテージがあると考えています。そういった研修歯科医に対しては、基本的総合的診療能力を習得することにとどまらず、専門知識、高度技術が習得できるようにサポートしていくことが本来の我々の役割であると感じるところです。岡山大学に限ったことではありませんが、臨床実習を益々充実することで、その後の臨床研修をより質の高いものにしていかなければなりません。

最後に今後の展望を少し考えてみたいと思います。キーワードは「自立」、「プロフェッショナリズム」であると考えています。少々の細かいことは目を瞑ってもよいと思っています。それよりも歯科医師として自分の果たすべき社会的役割を自覚し、強烈な倫理観を持ち、進んで学習に取り組む研修歯科医を育成したいと思っています。実現させるには高い壁がありそうですが、それでも我々指導歯科医は、常に研修歯科医を刺激しながら、社会に求められる歯科医師の育成に努めなければならないと思っています。

臨床系診療科の先生方には日頃から、並々ならぬご協力を賜り、この場をお借りして深く感謝申し上げます。今後ともより一層のご指導をよろしくお願い致します。

## 「平成23年度 歯科衛生士室 活動報告」

歯科衛生士室  
三浦 留美・樋口 夕紀子

● 毎年「歯の衛生週間」に行っている、歯科独自のイベントを今年度もH23年6月9日(木)に開催いたしました。今年度は『歯ッピーライフ2011～噛んでおいしく食べて歯ッピー♪取ってビックリあなたの歯垢～』と銘打ち、スタンプラリー等を取り入れた、賑やかなイベントとなりました。



事前のラジオ放送や、新聞による紹介等も反響を呼び、延べで300人余りの参加者を数えました。

### 《主なイベント内容》

- \* チェロとピアノの生演奏
- \* 歯科衛生士による体験ブラッシング
- \* 歯科看護師による嚥下食の展示
- \* ミニ公開講座
- \* 歯科技工士による特殊技巧物の展示
- \* 化学療法を受けている方の口腔相談
- \* 子供さんへのフッ素塗布
- \* 塗り絵コンテスト



平成24年度は6月7日(木)に開催いたします。ご協力のほどよろしくお願い致します。

● H24年2月23日～26日は歯科衛生士 樋口夕紀子が 特定非営利活動DNOWの活動の一環としてベトナム(ホーチミン)にて歯科ボランティア活動に参加しました。対象はFFSC(FRIENDS FOR STREET CHILDREN)というベトナムのNGO施設の児童です。1日目は、150人位の児童の問診や検診、口腔内写真撮影のアシストを行い、2日目は、その内治療の必要な約50名の、診療アシスタントを行いました。現地での活動や出会い、また一緒に活動をしたチームの方々との出会い等、どれも貴重な経験になりました。参加できた事を大変嬉しく思います。



- 当院歯科衛生士室は多くの歯科衛生士養成校の実習生を受け入れております。23年度は、下記表のように6校の受け入れを行い、計282名の実習生に、延べ188日間に渡り岡山大学病院での臨床実習を受けて頂きました。  
最近では、各診療科での実習の他に、「医科との連携を実習したい」ということで、チーム医療に携わる当院歯科衛生士について、医病へ往診に出たり、PERIO（周術期管理センター）の見学に付いて行ったり、しております。  
急性期病院での実習は学生にとっても貴重な体験で、開業医とは違った、医科歯科連携の中で働く歯科衛生士の役割を学べると、どの学校からも好評を得ています。

	人 数 (名)	1人あたりの実習日数(日)
岡山高等歯科衛生専門学校	2年生 53	2
	3年生 54	2
福山歯科衛生士学校	38	8
ベル歯科衛生専門学校	30	5
姫路歯科衛生専門学校	32	10
穴吹医療カレッジ	1年生 30	5
	2年生 11	19
	3年生 15	23
神戸常磐大学短期大学部口腔保健学科	19	20

来年24年度は、今年度お休みしていた、吉備国際大学短期大学部保健科が、また実習に来られますし、新たに「インターナショナル岡山歯科衛生専門学校」が3年生の実習申請をして来られていますので、計8校の受け入れとなります。

各診療科の先生方には多大なご協力を得ており、心よりお礼を申し上げます。ありがとうございます。これから教育機関でもある当院の歯科衛生士として自覚を持ち、教育のできる歯科衛生士としても精進していかなければならないと、使命を新たにしております。今後とも歯科衛生士室をよろしく願いいたします。



## 「技工室の近況」

技術部歯科部門技工室  
神 桂二

技工室では病院の各診療科から製作依頼を受けた歯科技工物や口腔内外の「生体に関するモノづくり」を一括管理し、スピーディでかつ高品質なモノを効率的に製作し診療支援をしています。

技工物製作依頼件数は毎年平均 5.5%の伸びを示し（図 1）、中でも口腔インプラント修復（図 3）に関する依頼件数は、5 年前に比較すると約 2 増となり歯科診療内容の変化が現れていると感じています。これらに対応してインプラント専門歯科技工士（日本口腔インプラント学会承認資格取得）が技工物製作するための患者情報（口腔内デジタル撮影や X 線画像および模型記録数）を診療室などより直接取得して記録・検討し、質の高い製作支援をしています。

また、医科との連携業務では、PERIO 外来から依頼を受ける手術用の歯牙損傷防止用プロテクター製作支援や整形外科をはじめ医・歯の連携チーム（形成外科、耳鼻咽喉外科、口腔外科）および再建・病態の口腔外科から依頼を受けて製作している実物大臓器立体モデル製作支援（図 2）など、いずれの業務支援も前年比を上回っています。これらに対してはモデル製作専門歯科技工士を 1 名設け、その他は輪番体制で業務対応しています。

平成 24 年度から、頭頸部がんセンターの設置や平成 25 年度の新中央診療棟開設に伴い、技工室の施術支援の業務量の増加やその重要性から歯科技工士（特別契約職員）1 名が増員となり 8 名のスタッフで始動することとなりました。今後とも、各診療からの診療要請に迅速に対応し、医療現場で必要とされるホスピタルテクニカルラボラトリーを目指してまいりますので、ご支援ご協力を宜しくお願いいたします。

図 1

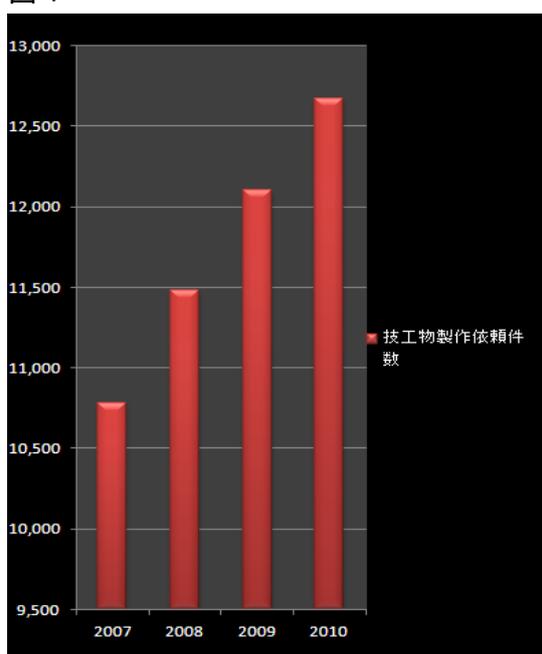


図 2

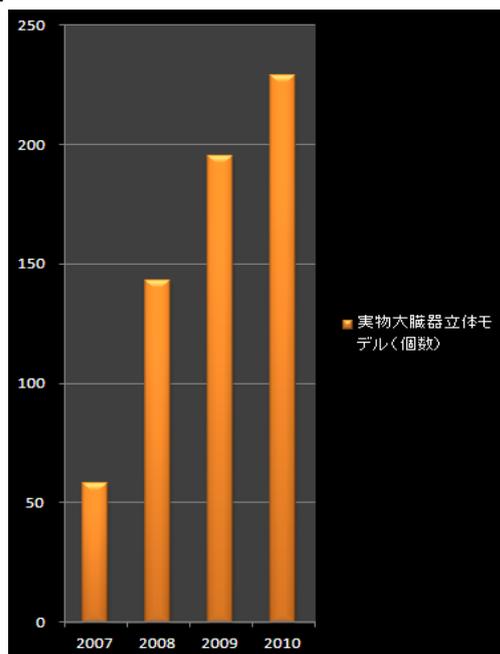


図3 インプラント修復



・3D 立体モデル

・顎再建装置プレベンディング

・モデルサージェリー



・睡眠時無呼吸症用アプネア

・エピテーゼ

・スポーツマウスガード



## 「スペシャルニーズ歯科センターの活動について」

スペシャルニーズ歯科センター  
センター長・教授 江草 正彦

近年、医療の各分野において地域連携クリティカル・パスが作成・運用され、患者に標準化された医療を効率的に提供することに成功している。しかし歯科医療の分野においては、これまで地域で患者をサポートする地域連携パスは、まだまだ普及していない状況である。障害者歯科の分野は、現状では特に重度の障害者に対応した設備、ノウハウを持つスタッフを有する医療機関が限定されているため、地域で効率的に診療を行うシステムの構築が、特に望まれていると思われる。そこで障害を有する患者が最少の負担で、最適な治療を受けられるよう支援する目的で地域連携クリニカルパスを開発した。また本計画は、口腔の予防、治療およびリハビリテーションの各方面から患者のQOL向上を図ることを目的としているため、障害者福祉の向上に寄与するものと思われる。

(図1)

平成23年5月には歯科医療と福祉のコラボレーションを図る学際的な日本歯科医療福祉学会を主宰した。「地域医療連携一人々の健康と生活を支える連携とは一」を大会テーマとしておこなった。障害者歯科、高齢者歯科、その他の歯科の分野、リハビリテーション分野、医科分野、社会福祉・教育分野、行政職など多岐にわたる連携と支援についての教育講演・シンポジウム・市民公開講座等をおこなった。(図2)

### 摂食・嚥下リハビリテーション部門について

平成15年度よりスペシャルニーズ歯科センター(旧第一総合診療室)に摂食・嚥下障害への対応する専門外来として摂食・嚥下リハビリテーション部門が開設された。開設後から患者紹介が多く、患者数や診療回数が増加している。平成21年度からは、摂食・嚥下リハを担当する常勤歯科医師が2名となり、病棟・外来での紹介患者・診療回数も増加している。

摂食・嚥下障害を有する患者の原疾患は多様であり、平成22年度、23年度の紹介元をみても多岐にわたっている。初診患者のうち、PERIO(周術期管理センター)での嚥下評価が全体の1/4、それ以外は多くの診療科からの依頼がある。主な疾患としては、神経内科や脳神経外科からのALS(筋萎縮性側索硬化症)やパーキンソン病などの神経・筋疾患や脳腫瘍術後などが多くを占める。心臓血管外科、呼吸器外科からは術後早期の経口摂取や反回神経麻痺による誤嚥リスクの評価依頼が多い。小児神経では、先天性疾患による摂食・嚥下障害患者の紹介がある。ICUやHCUでは、抜管後の経口摂取について、誤嚥リスクの高い患者(頻回のムセ、嘔声、長期挿管時など)に対する嚥下評価依頼がある。

また、PERIO(周術期管理センター)における術直後の嚥下評価や、紹介患者の重症化に伴い、嚥下造影検査だけでなく嚥下内視鏡検査の必要性も増加してきている。今後入院患者の誤嚥リスク回避や早期経口摂取を目指し、院内連携が必要となってくると思われる。(図3)

摂食・嚥下リハビリテーションの研修会も開催しており、平成 21 年度より岡山大学公開講座として、岡山大学摂食・嚥下障害研究会（食支援ネットワーク）や摂食・嚥下リハビリテーション従事者研修会（初級コース・上級コース）を企画・実施している。従事者研修会上級コースでは、歯科医師、歯科衛生士、看護師、栄養士など約 20 名の方が参加している。実際の診療見学だけでなく、摂食・嚥下障害の評価やリハビリ手技、口腔ケアなどの実習や症例検討会での発表など半年間の実習を行っている。

研修生は岡山県内（岡山市、倉敷市、津山市など）だけでなく広島県（福山市）、兵庫県（姫路市）、香川県の近隣各県からの参加者もあり、岡山大学病院から転院・退院した患者の紹介先となることも多い。今後も、様々な地域で摂食・嚥下リハビリテーションを含めた医療連携がとれるように、研究会・研修会を通じて知識と技術の向上を行うと共に、情報のネットワークを構築し、摂食・嚥下障害患者の QOL が向上できることを目指したい。（図 4）

図1 スペシャルニーズ歯科センターの地域医療連携



図3 スペシャルニーズ歯科センター 摂食・嚥下リハビリテーション外来 初診患者数 (平成22年度・平成23年度)

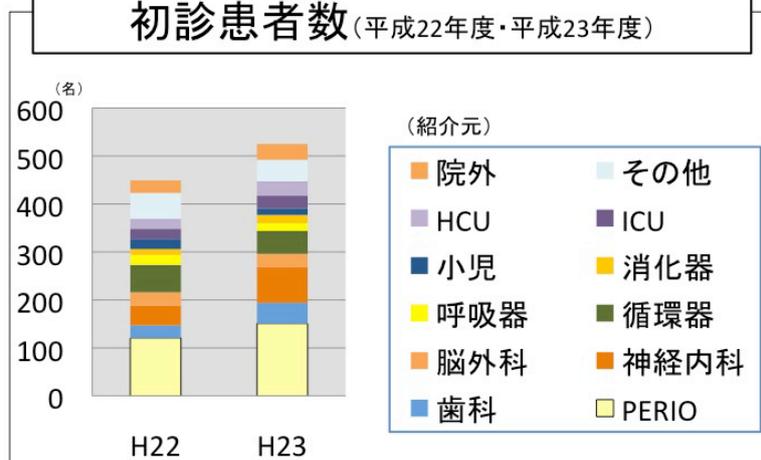


図2

**第18回  
日本歯科医療福祉学会大会・総会**

地域医療連携 一人々の健康と生活を支える連携とは—

日時:平成23年5月15日(日) 9:00~16:10  
会場:岡山大学 創立50周年記念会館(津島キャンパス)

市民公開講座:佐々木正美 先生(川崎医療福祉大学 特任教授)  
『今あらためて考える父性・母性』  
(子どもと家族のコミュニケーションへの希望を求めて)

**教育講演Ⅰ**  
「地域医療連携における口腔管理 —香川シームレスケア研究会の取り組み—」  
木村年秀先生(三豊総合病院 歯科・口腔外科医長)

**教育講演Ⅱ**  
「地域福祉からみた歯科医療」  
緒方克也先生  
(医)おがた小児歯科医院理事長・岡山大学 臨床教授)

**ランチョンセミナー**  
「地域生活期の摂食・嚥下機能を守る —歯科からのアプローチ—」  
石田 聡先生  
(東京歯科大学 摂食嚥下リハビリテーション・地域歯科診療支援科・講師)

**シンポジウム**  
「岡山市での医療連携の現況」  
角谷真一先生(かどや歯科医院 院長)  
松尾敬子先生(岡山医療センター 歯科衛生士)  
森光 大先生(あいの里クリニック 管理栄養士)

後援: (社)岡山県歯科医師会、(社)岡山県歯科衛生士会、(社)岡山県栄養士会

大会長:江草正彦(岡山大学病院スペシャルニーズ歯科センター センター長)  
準備委員長:森 貴幸(岡山大学病院スペシャルニーズ歯科センター 副センター長)  
準備委員会:岡山大学病院スペシャルニーズ歯科センター TEL・FAX:086-235-6823



図4



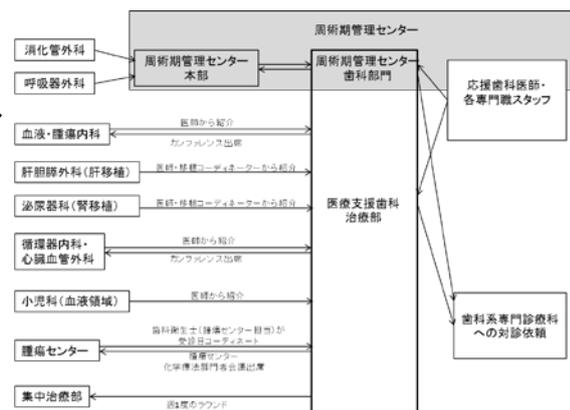
「初年度活動報告と次年度へ向けての抱負—医療支援歯科治療部」

医療支援歯科治療部  
副部長 曾我 賢彦

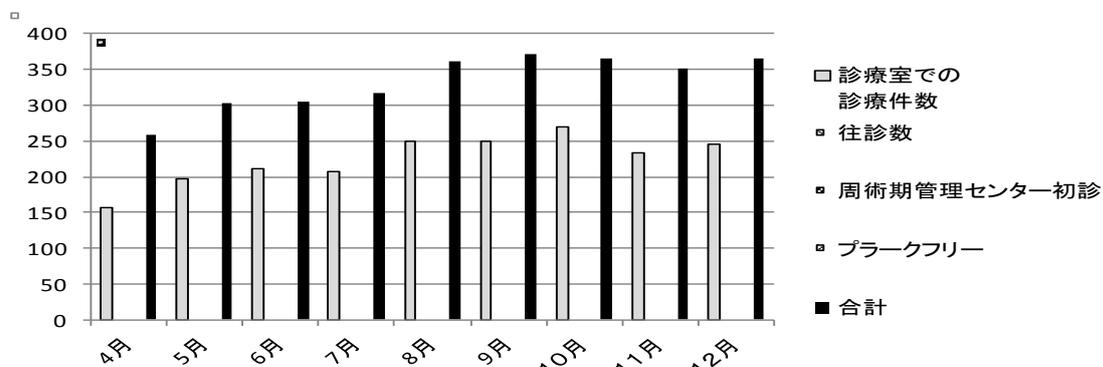
2010年12月に、特殊歯科総合治療部が改組・改変され、岡山大学病院に「医療支援歯科治療部」なる診療部が誕生しました。旧第二総合診療室の業務をさらに発展させ、本院で行われる移植医療等をはじめとした高度な医療を歯科の専門性からサポートする拠点としての役割が期待されています。2011年4月から実質的な活動を開始しております。部長に歯科系代表副病院長の森田教授が兼任で就任され、私曾我（歯周科から配置換）と山中先生（予防歯科から配置換）が専任教員となりました。10月からは吉富先生を医員として迎え、12月からは研究事業費から蔵重さん（以前歯科衛生士として本院でご活躍されていました。）を事務補佐員として迎えるに至っています。歯科棟2階に医局のスペースを頂き、当初は倉庫のようでしたが、整備に向けて様々な予算を措置していただいたこと、そして上述した医局員の増員で、部屋は医局らしい雰囲気を感じ出すようになって参りました。

岡山大学病院の様々な医科歯科連携における歯科側の窓口・拠点の役割を担い、必要な歯科治療を機動的に行うとともに、歯科系各診療科の専門的な治療を受けられるようにコーディネートするべく、体制を整えつつあります。

右図に示すような各医科系診療科との連携はすでにほぼ構築に至り、実際の運用に至っています。



診療件数は下図に示す通り上半期に明らかに増加しました。1日20件を超える診療件数の日も多くなり、すなわち何かの形で歯科の専門性をもって医科と連携する機会が明らかに増加しています。



本治療部の特徴は多くの歯科系各診療科や看護師、歯科衛生士等の専門職のスタッフの皆様から多大なる人的・質的な支援をいただき、その専門性をいかんなく発揮して頂いていることで、おかげをもちまして初年度立派に活動を軌道に乗せることができたと考えています。平素よりご協力いただいております先生方、各専門職のスタッフの皆様には心よりお礼申し上げます。

医科歯科連携の展開に当たり、私はできるだけ医科系診療科と当治療部との間に双方向性の関係・連係を持たせるよう試みてきました。カンファレンス等に積極的に出席し、歯科治療が医科治療の別枠にあるオプションの一つではなく、必要な場合は医科治療の一環として患者が歯科治療を享受できる環境を整備したいと考えてきました。

前頁の図で示した以外の診療科からも多くの紹介を頂いており、その内容に対応するに当たり、本院の医療の質を上げるにあたり歯科ができることはまだまだあると感じさせられます。しかし、上述したような新たな医科系診療科と当治療部の連携構築には年度後半くらいから少々慎重になっています。これは月次診療件数の伸びが鈍っていることにも表れています。応援は多大に頂いているのですが、当治療部において指揮をとる者が数的にも質的にも限界に近いこと、そして診療チェアの数などハード面の限界があります。

ただ、難しい問題に対して頭から無理だと考えていては埒があきません。診療台の効率的な運用で自科のチェアを積極的に利用するよう勧めて下さる診療科もあります。また、来年度は初めてレジデントを受け入れるとともに、医員も増員することとなっています。まだ成長および発展の余地はあり、より充実した診療部となるよう努力を重ねて参る所存です。

この稿を依頼された期に、中医協から診療報酬点数にかかる答申がなされ、まさに当治療部で行っているような医科歯科連携に対して診療報酬点数がつく可能性が強くなっています。中医協の会議では、本院における医科歯科連携がモデルケースとして挙げられ、議論のネタになっていたと聞きます。本邦における立派な医療のモデルとしてさらなる成長を重ね、より良い医療に一石を投じることができればと考えております。今後とも皆様におかれましては、当治療部の活動に際し、ご理解とご協力を頂ければ幸いです。どうぞよろしくお願い申し上げます。

### 編集後記

歯学だより Vol. No 7 をようやく発刊することができました。ひとえに、ご多忙中にもかかわらず、原稿執筆してくださった諸先生方に厚く御礼申し上げます。さて岡山大学病院は、森田歯系副病院長、浅海副研究科長も述べておられましたが、2012年4月から、日本初、岡山発の医科歯科連携岡山大学病院頭頸部がんセンター (<http://www.okayama-u.ac.jp/user/ohncckpy>) が開設いたしました。提唱者は、形成外科の木股教授で、今回のセンター長です。2011年、形成外科、木股教授、耳鼻科の西崎教授、そして、私、水川の3人が、榎野病院長に頭頸部がんセンター設立要望書を提出いたしました。榎野病院長は快諾され、榎野病院長の強いリーダーシップ、木股教授の強固な信念、森田歯系副病院長の交渉力などが、このセンター実現に大きく貢献寄与したものであると思います。医科歯科連携は、今後の歯科の発展のキーワードであり、私も木股センター長を補佐する任にあたり、改めて歯系の皆様にご協力いただければと思います。何卒よろしく願い申し上げます。

編集：口腔外科再建系 水川展吉



### 歯科系広報専門部会

(平成24年度委員)

部会長	窪木 拓男	歯科放射線科	此内 浩信
総合歯科(歯科研修部門)	白井 肇	予防歯科	江國 大輔
むし歯科	神農 泰生	小児歯科	假谷 直之
歯周科	谷本 一郎	矯正歯科	本城 正
補綴科(クラウンブリッジ)	水口 一	スペシャルニース 歯科センター	森 貴幸
補綴科(咬合・義歯)	洲脇 道弘	歯科衛生士室	高橋 明子
口腔外科(再建系)	水川 展吉	技工室	神 桂二
口腔外科(病態系)	岸本 晃司	医療情報部(歯系)	小河 達之